

地方都市におけるファミリーコースの変遷と 都市空間の再編・変容

——津軽地域 / 弘前市を事例に—— (二)

山口 恵子・山下 祐介

<目次>

1. 研究目的と調査方法
2. 津軽地域の社会変容と家族
(以上前号)
3. 都市住民の生活史と都市空間の変遷
4. 考察
参考文献
(以上本号)

3. 都市住民の生活史と都市空間の変遷

3-1 弘前市調査の研究目的と調査方法

3-1-1 研究目的

本節では、弘前市内で実施した家族調査の結果を手がかりに、地方中核都市内のファミリーコースの変遷を見ていく。まずは、本調査の目的および方法について確認する。

弘前市（弘前市は平成18年（2006年）2月に岩木村および相馬村と合併して新生弘前市となったが、ここでは合併前の弘前市を念頭において議論を行う）は、津軽地域の南部に位置し、東西26キロメートル、南北31キロメートル、面積273.8平方キロメートルである。昭和30年（1955年）、昭和32年（1957年）の合併により現在の市域となった。弘前市の人口は昭和50年代まで増加を続けたものの、それ以降は横ばいの状態が続き、現在は約17.8万人である。津軽地域を代表する地方中核都市といえる。

弘前は藩政時代から津軽地域の中心地として位置づけられ、その歴史的な変遷を遂げてきた。藩政奉還以後は青森市が県庁所在地となり、政治的行政的中心性は薄れたが、明治30年（1897年）の第八師団の設置により軍都として、また戦後は弘前大学を擁し、学都として発展した。また大正期より中心商店街が形成され、津軽地域の商業の中心地にもなった。その後、高度経済成長期を経て

昭和40年代以降は、郊外型住宅団地の開発とバイパスの開通、大型店の進出等により市街地が大きく広がる。と同時に、現在では中心商店街の衰退、中心街区のスプロール化などの問題が深刻化している。

こうした変遷の中で、この都市に居住する人々はどのような生活を送ってきたのか。とくに家族を形成し、都市の構成員を再生産していく過程で、人々は都市をどのように活用してきたのか。本節では、都市空間の変遷と都市住民のファミリーコースとの関わりを明らかにする。

ところで都市空間の内部には多様な町内社会が存在する。それぞれの町内社会にはそれぞれの個性があり、固有の機能・役割を果たしている。都市は、ひとまずこうした町内社会のモザイクによって構成されていると言える。ここでは、こうした町内社会の各モザイクの特徴とその変遷を捉え、個人・家族がこうした都市のモザイクの中で個々の都市の機能をどのように活用してきたのか、さらにそうした活用の中で、都市のモザイクがどのように変化していくのか、という形で都市空間構造の変容にアプローチしていく。

なおここで言う「町内社会」（以下、「まち」とも記す）とは、町内会・自治会といった地域集団（これを小さな地方自治体と捉える研究もある）を指すとともに、その基層にある小さなコミュニティ単位を示してもいる（秋元律郎・倉沢進編、1990他）。ただし、ここでは町内社会論に関する詳しい議論はさけ、弘前という伝統消費型都市を捉えるための分析の手掛かりとして、この語を使用したい。

3 - 1 - 2 調査の手順

前述したように、本研究では次のような手順で調査地を選定し、調査を実施した。

- 1) 弘前市の都市居住形態のマクロ分析。弘前市都市計画課で当時策定中の『弘前市都市計画マスタープラン』（2003年）所収のデータを活用し、さらに弘前市発行の『弘前市史』の参照、および聞き取り調査から、弘前市の都市形成過程と居住空間の分布状況を確認した。
- 2) さらに、弘前市内の町内社会の状況を探るため、市内の各町会が作成している町会史・誌を収集し、場所によっては聞き取りを行った（収集した資料の一覧は巻末参照）。
- 3) 以上をもとに調査地を選定した。最終的に市内16地区を選定し、それぞれで1名ずつ（地区によっては2名）に対して聞き取り調査を行った。

まずはここで、おもに1) 2) の結果から、弘前市の都市のモザイクについての大まかな区分を行っておきたい。

3 - 1 - 3 弘前市の変遷

まず、弘前の市街地の広がり方を確認する。藩政時代の弘前は、弘前城を中心に侍町・商人町・職人町・寺社町等が機能的に町割りされていた（図3 - 1）。また、後に弘前市域内に組み込まれる周辺農村部はこうした市街地とは別に村落として構成され、城下と農村をつなぐ街道沿いに農村の物流の要所としての「クチ」が形成されていた。

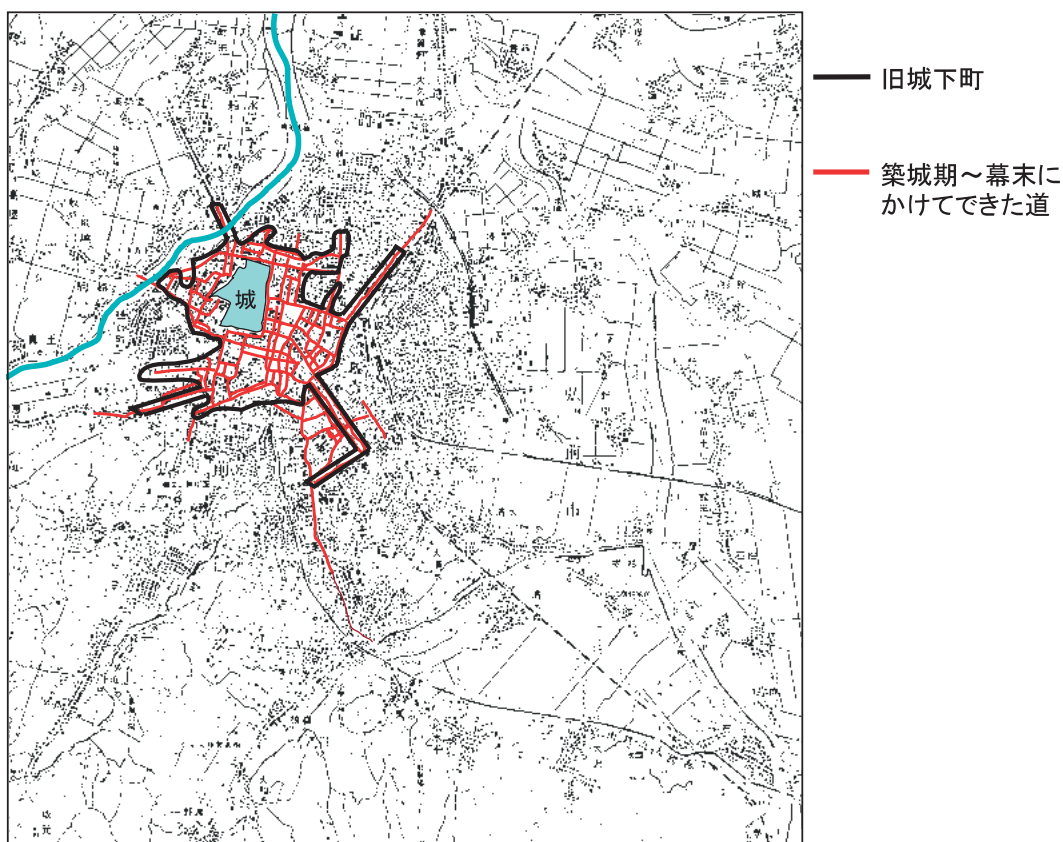
藩政奉還によりこうした町割りは解消され、青森県設置で青森市に行政的機能が移行したことに

よって、弘前は都市としては一時衰退した。しかし明治27年（1894年）の弘前駅（奥羽本線）の開
設、明治30年（1897年）の第八師団の設置によって、駅・軍事施設を中心に近代都市としての成長・
発展が始まった（図3 - 2）。

戦後、軍隊が撤退した後、軍用地の多くが新制弘前大学等の教育研究機関に切り替えられた（図
3 - 3）。さらに、昭和40年代からは住宅・土地開発が進められて市街地が大きく広がり、昭和50
年代以降はモータリゼーションの中で道路網も現在のように大きく広がった（図3 - 4）。

これらの弘前の変遷をふまえると、現在の弘前市街地を大きく次の4つの地域に区分することが
できる。

図3 - 1 弘前市街地：築城期～幕末

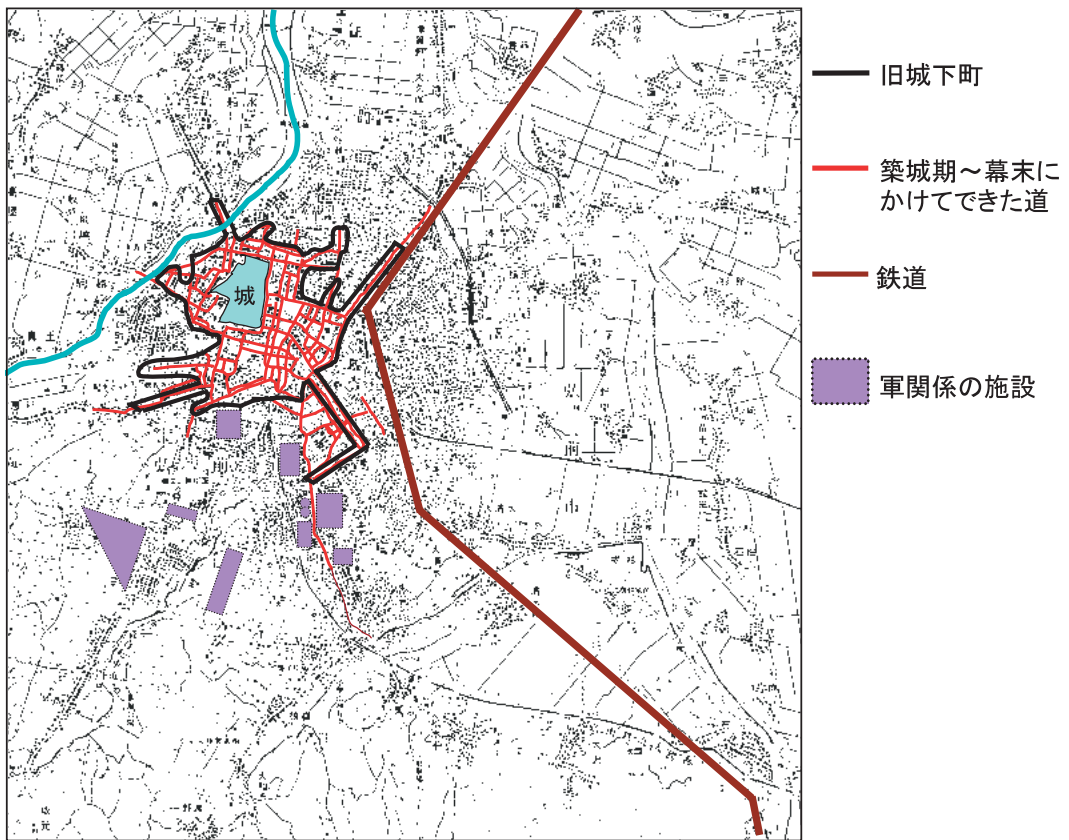


A) 「旧城下町」：藩政時代に成立した弘前藩の城下町を踏襲した地域。道路の拡幅や荒地の開発など若干の異動はあるが、戦災を免れた当市では、現在もその町割りが残されている。

B) 「明治発展地域」：鉄道・駅の開発、第八師団の設置により、明治末期から大正期にかけて開発が進められ、この時期に急速に発展した地域を「明治発展地域」としておく。新しく形成された駅前周辺や、第八師団の関係で藩政期に城下町の最縁部に形成された地域が含まれる。

C) 「近郊農村地域」：藩政時代からの農村地域のうち、弘前市域に編入され、昭和40年代から

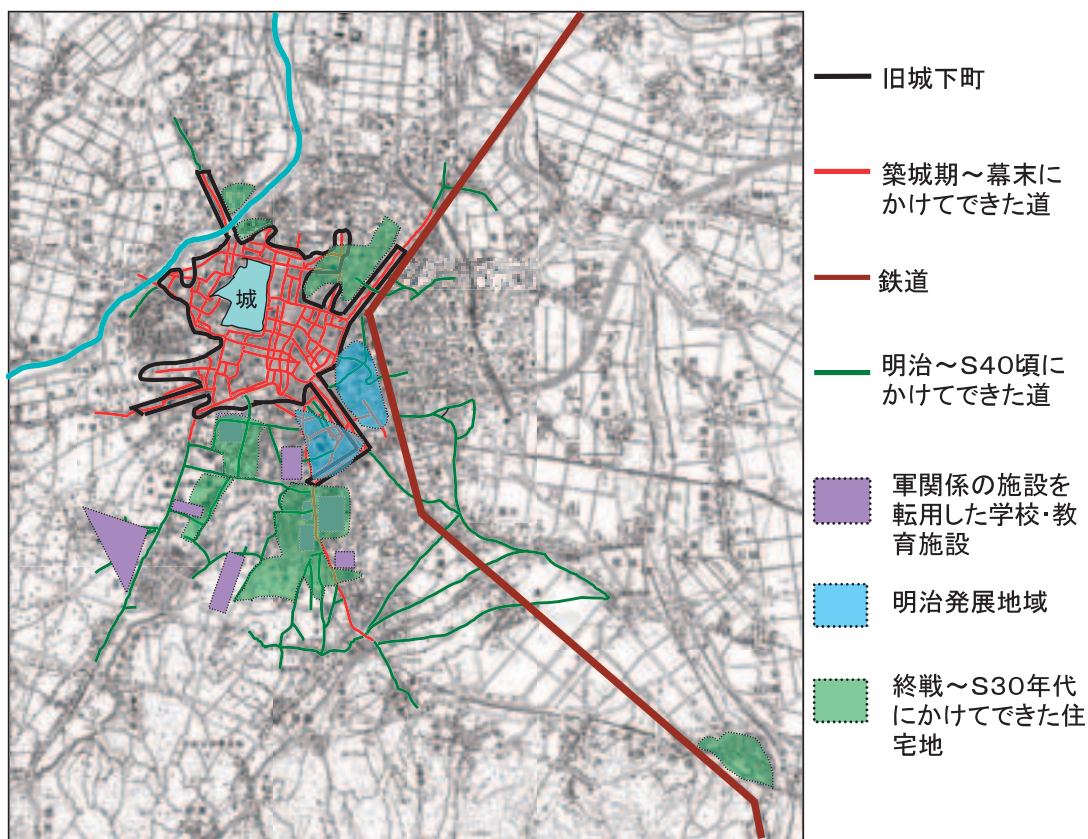
図3-2 弘前市街地：明治期



はじまる「新興住宅地域」の開発によって市街地と接合し、住宅地としての様相をもつようになった地域である。都市的職業に就いているものがほとんどだが、農地を有し農業を営むものもまだ少なくはないので「近郊農村地域」とした。また新興住宅地とは別の町会になっていて、村落社会は維持され続けてもいる。

D)「新興住宅地域」：昭和40年代以降の開発によって、住宅地として造成された地域である。主なものに、城西、城東、桜ヶ丘、宮園、青山、清原、安原等がある。

図3-3 弘前市街地：1960年代まで

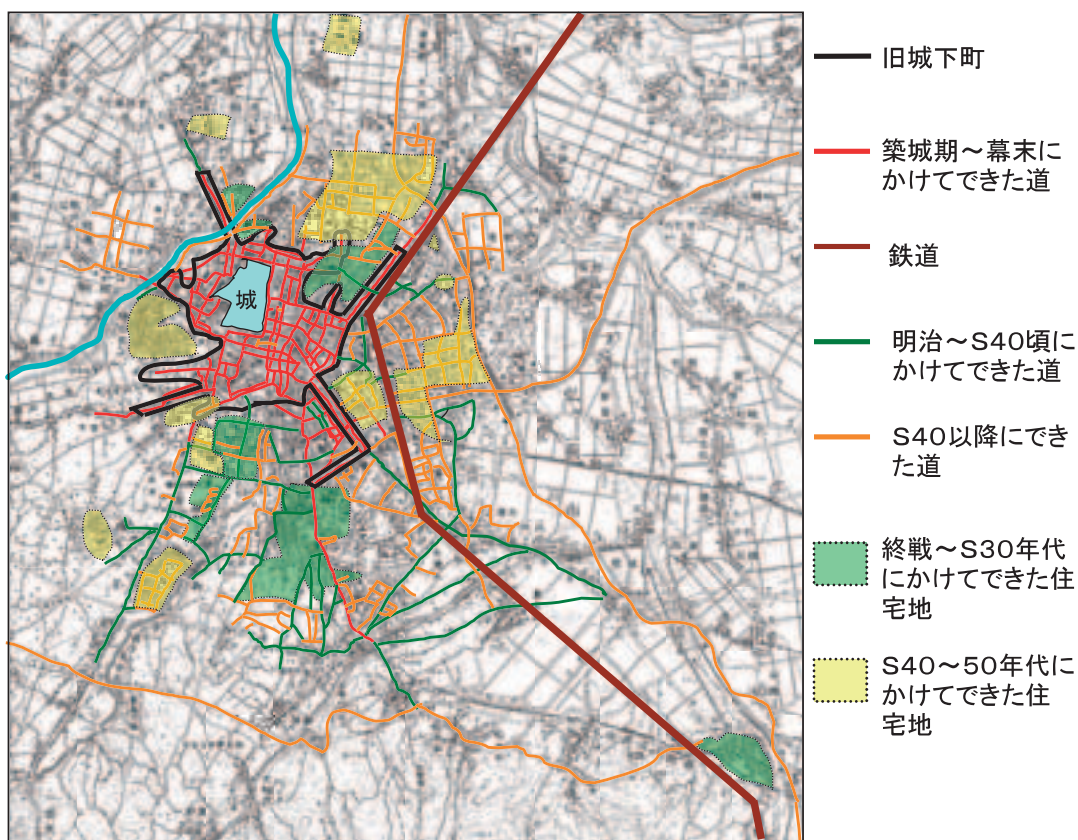


3 - 1 - 4 調査地の選定

弘前市は、合計303町会で構成されている（このうち弘前市町会連合会に加入しているのは、平成14年（2002年）現在、293）。「旧城下町」に属する町会では、戦中も戦災を免れたため、町の形が藩政時代そのままに現在まで受け継がれているところも多い。町会には固有の歴史があり、そこに新しい地域が加わっていく形で弘前市の都市空間は発展してきた。調査地の選定に先立ち、各町内社会の特徴を知るために各町会誌の検討を行った。

町会誌ないしはそれに準ずるものの発行を確認できた町会は全部で39あり、直接入手したほか、現物を入手できなかったものは弘前市図書館、弘前大学図書館で複写した。これらをふまえて、上

図3-4 弘前市街地：1960年代以降



記4つの地域から、合計16を調査地として選定して調査を行うこととした(図3-5)。選定の経緯は以下のとおりである。

A「旧城下町」は大きく上町と下町に分かれる。また藩政時代の侍町・商人町・職人町の区別も重視した。上町で上級侍町であった<在府・相良町>(在府町・相良町はもとは別々であったが、弘前大学医学部の立地などにより戸数が減少し、現在は一つの町会となって活動している)、上町で商業の町であった<本町>、馬場があり、下町の侍町であった<馬屋町>を取り上げる。また城下町の周縁部には、城下(市街地)への「入り口」という意味を含めて「クチ」と呼称される農村と城下の物流の要所があり、浜の町、駒越町、茂森町、松森町、和徳町の5つが存在した。ここで

図3-5 調査地の地図



- 「旧城下町」: ①本町 ②在府・相良町 ③馬屋町 ④土手町 ⑤駒越町 ⑥浜の町
 「明治発展地域」: ⑦富田3丁目 ⑧富野町 ⑨大町
 「近郊農村地域」: ⑩千年 ⑪向外瀬 ⑫小比内
 「新興住宅地域」: ⑬青山 ⑭城東中央 ⑮桜ヶ丘 ⑯城西

は、下町で岩木町との物流の要所であった<駒越町>、同じく下町で鱒ヶ沢町との物流の要所であった<浜の町>を取り上げることとした。また中心商店街(土手町・百石町)から、<土手町>を取り上げた。以上の7つのまちを「旧城下町」から選択した。なお職人町については、今回の調査では取り上げなかった。

B「明治発展地域」からは、第八師団の設置により開発が進められ、商業地・住宅街などを形成した<富田3丁目><富野町>(これらはもとは清水村富田に属し、昭和6年(1931年)に弘前市に合併された。そして、昭和31年(1956年)の町名改正で、それぞれ、富田3丁目、富野町となった)。弘前駅設置によって駅前の商業地として発展した<大町>。以上の3つのまちを選んだ。

一方、C「近郊農村」、D「新興住宅地域」については、建設時期の違う代表的な新興住宅を4つ取り上げ、これに対応する形で近郊農村を選ぶこととした。まず下町の西側に比較的早い時期に造成された<城西>の団地を取り上げた。これにやや遅れて形成された市街地の南西部の<桜ヶ丘>団地、またその近くにあり農村部の中では比較的宅地化の波が早かった<千年>を選定した。また駅の裏側の水田地帯を開発して造成された城東団地の中から<城東中央>、その造成に関わった農村として<小比内(さんびない)>を、さらにごく最近開発された<青山>と、その造成に関わった農村地区<向外瀬(むかいとのせ)>を取り上げた。合計で、近郊農村地域3つ(<千年><小比内><向外瀬>)、新興住宅地4つ(<城西><桜ヶ丘><城東中央><青山>)を選定した。

3-1-5 聞き取り調査の概要

これらの調査地では、おおむね2回の調査を行った。なお、第2節と同様に、この調査も弘前大学人文学部社会調査実習参加の学生および指導教官との共同作業の元に行われた。

第1回目は各町内で1、2名のインフォーマントに対して、地域の概況とその変容過程についての聞き取り調査を行った。インフォーマントとして、その町会の歴史や現況に詳しいことが重要であったため、元・現町会長、町会誌発行に関わった人、および公民館等に紹介を受けた人などを対象とした。できるだけ70歳代に年代を揃えることを試みたが、結果的には、大正5年(1916年)生まれから昭和7年(1932年)生まれの人々(70・80歳代)が対象となった。第2回目は、そのインフォーマントのライフヒストリーの聞き取りを行った。最終的に、計16人に調査を実施できた。聞き取りの内容については、おもにインフォーマントの居住地・進学先・就業先の選択の仕方に焦点を当てた。

以下、まず3-2では、弘前市内の各町内社会の変遷について示す。3-3では、そこで生活してきた諸個人がそのライフコースにおいてどのようにこの都市空間上を移動してきたのかを明らかにする。3-4では、さらにファミリーコースの動向を通してみた地域の事例をあげ、第2節でみた弘前市以外の周辺地域(非都市部)のそれと比較しての留意点を示していく。なお、以下、「現在」と言及しているのは、調査時点である平成15年(2003年)および平成16年(2004年)を指す。

表 3-1-1 弘前市の変遷

年代	旧城下町					明治発展地域	近郊農村地域			新興住宅地域				
	本町	在府・相良	馬屋	土手町	駒越		クチ	浜の町	千平	向外瀬	小比内	青山	城真中央	桜ヶ丘
藩政期	中心商業地	侍町	馬場、侍町	商業地	農村向けの商人・職人町 (若木町対象)	農人町 商人街	大町 駅前 卸問屋	農村(米)	農村(米)	農村 (米、赤土)				
M27 鉄道開設 M30 軍隊	<官公庁>	娯楽に貸家	<高校>			富田・富野 商人街	農村(米)	農村(米)	(米、赤土)					
大正期		娯楽に貸家				学生街 下宿 アハート 商人街	(りんご、米)		(米、赤土)					
昭和期				<デパート>		閑散								
S20 終戦						商店街								
S23 弘大設立						商店街								
S30						駅前再開発								
S40 ハズ						下宿 アハート								
S50						下宿 アハート								
モータリゼーション 駅前再開発 S60	テナント 自宅 アハート					素通りされる町								
平成大型店														

商業地域

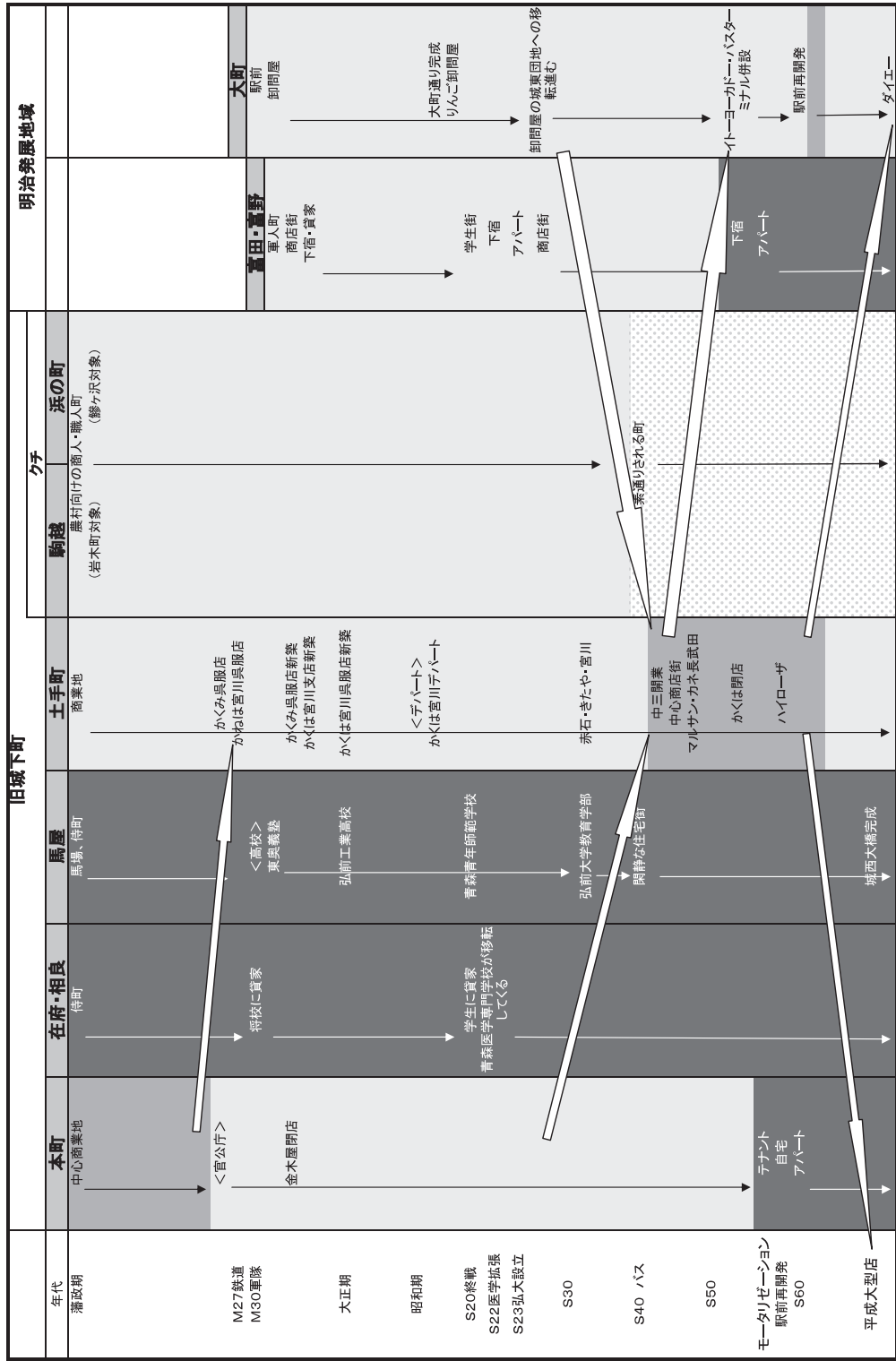
住宅地域

農業地域

衰退

繁栄

表 3-2 「旧城下町」・「明治発展地域」の出来事の変遷



3-2 町内社会の変遷

ここでは、町内社会の変遷を明らかにするために、選定した調査対象地それぞれについて、第2節と同様に年表を作成し、分析を行った。弘前市における調査でも、分析方法は第2節で行った方法を踏襲した。対象とした計16町会の歴史を簡単に一覧にしたものが表3-1である。この表を参照しつつ、各町内社会の変遷について分析を行っていく。

まずは、第2節と同様に、各地域ごとに行った時期区分について、こうしたそれぞれの内部的な変化が3-1で示したような都市全体の変化とどのように絡み合っているのかを関連づけるために、各地域の変化の導因として大きく働いたと思われる、弘前という都市全体に起こった次の4つの出来事に注目して検討していった。

- 1) 明治末期の鉄道・駅の開通と第八師団の設置
- 2) 終戦と新制弘前大学の設置
- 3) 昭和40年代のバス交通網の拡大
- 4) 昭和50年代のモータリゼーションと相次ぐ大型店舗の開店、駅前再開発

これらの要因が各町内社会にどのような形で影響を与え、都市空間内の位置づけを変えていったのだろうか。まずは、先の4つの地区のうち、A「旧城下町」、B「明治発展地域」についてその変化を確認し、次に郊外住宅地開発の経緯を中心に、C「近郊農村地域」とD「新興住宅地域」の変遷を確認していく。

3-2-1 「旧城下町」・「明治発展地域」

(1) 藩政期

藩政期の城下町は計画的に住み分けがなされ、それぞれの地区に固有の機能が割り当てられていた。

<在府・相良町>はもとは足軽町として形成されたが、のち立地条件などから上級侍町となった。在府町は江戸で召抱えた侍の町の意であり、相良町は幕府から人吉より預けられた相良清兵衛にちなむものである。

<馬屋町>はもとは城郭内に位置づけられ、町内の北西側には馬場があった。馬屋とその管理をする侍の居住地であった。

一方、<本町>は、町割りの当初は職人町で鍛冶職人が多かったが、寛文2年(1662年)に参勤交代の道筋が変わり、藩士の通る本通りということで<本町>となった。職人たちは別に移され、<本町>はかわりに商業地へと転換されて、宝暦年間(1751-1762年)には城下の中心商業地へと発展した。

これに対して<土手町>は、もともと城下町の外に位置していた。しかし参勤交代路として位置づけられ町割りがなされると、商家がたち並ぶこととなり、なかでも酒造業が盛んであった。

<駒越町>と<浜の町>はともに「クチ」と呼ばれ、農村との物流の要所であった。農村の人が城下の中心地まで行かなくても生活に必要な品々がそろえられるような、商人町・職人町としての役割を担っていた。また<浜の町>は岩木川舟運の拠点でもあり、藩の蔵屋敷があって御蔵町とも

呼ばれた。

(2) 鉄道・軍隊の影響を受けた時期 明治から終戦前

藩政奉還により、士族が没落し城下町が解体されていく中で、弘前市街地は停滞を余儀なくされた。しかし明治20年代末の鉄道の開通、そして明治30年（1897年）の第八師団の設置により、弘前は軍都として再び活気を取り戻していく。

明治27年（1894年）、弘前駅が城下町のややはずれに設置された。それによって駅のまわりには、物流拠点としての卸問屋が多く集積し、新たな町が形成されていった。さらに、明治30年（1897年）には第八師団の設置も続き、市街地は大きな変容を迎える。

具体的には、〈在府・相良町〉を中心として、「旧城下町」内には軍の士官が多く居宅した。また師団近接の旧富田町・清水村富田には、のちの〈富野町〉をはじめ新たな町が形成されていった。こうして師団前の富田大通りには、軍隊関係の御用商人の店が建ち並び、〈土手町〉を経由して兵器廠等の軍事施設のあった旧城内までの回廊がおおいに賑わうこととなったのである。しかしこれによって商業地の中心が〈本町〉から〈土手町〉に移行し、〈本町〉の商業地としての衰退がはじまることになる。それはとくに、明治37年（1904年）の豪商「金木屋」が〈本町〉から撤退（明治40年（1807年）倒産）することに象徴される。かわりに〈土手町〉が中心商業地として発展をとげ、大正12年（1923年）に開店した鉄筋コンクリート建て、弘前で初めてのエレベーターを設置した「角はデパート」が、中心商店街の、ひいては弘前の新しいシンボルとなっていった。

他方、弘前駅前には、駅前通りに商店街が形成されたが、昭和2年（1927年）に、駅前と第八師団を直結する道路が開通すると、人の流れが変わった。この新しい道路沿いに大町通りが形成され、各種商店、旅館、リンゴその他の卸問屋が立ち並んだのである（〈大町〉が正式に町会となるのは昭和41年（1966年））。

(3) 終戦・弘前大学設立の影響を受けた時期

終戦後、弘前は軍都から学都への転身を図った。第八師団に隣接して大正10年（1921年）に旧制弘前高校が設置されていたが、戦後の教育改革に伴い、昭和24年（1949年）、官立青森医学専門学校他5校を統合して新制弘前大学が、主に第八師団跡地を利用して設営された。

一方、〈在府・相良町〉では弘前大学医学部の設置・拡張により、相良町の民家の多くが移転した。他方で、この〈在府・相良町〉、〈馬屋町〉を含め「旧城下町」の地域では、弘前大学をはじめとする教育機関の設立の影響を受け、教師・学生対象の貸家などが増えていった。また第八師団そばの〈富野町〉も大学設立の中で、これまでの軍人相手の商売から、学生相手の下宿・商店・住宅地へと変化した。

(4) バスの影響を受けた時期

昭和40年代は、とくにバス交通網の拡大が地域に大きな変化をもたらした時期である。

つまり、バスという交通手段を使って、農村の人々が直接に弘前の中心地に入ってくることで

きるようになった。よって人々が「クチ」を利用しなくなり、<駒越町>や<浜の町>は素通りされる町となっていったのである。他方、中心商店街としての<土手町>は周辺地域から買い物客を集め、集客力を倍増させた。「カネ長武田」や「中三」などの大きなデパートの開店もあいづ、この頃は中心商店街がもっとも活気にあふれた時期である。<土手町>は城に近い方から下土手町・中土手町・上土手町に分かれているが、例えば上土手町のその頃の世帯数は150～160を数えた。

一方、弘前駅前の方でも変化が見られた。<大町>にあった数軒の卸問屋は昭和43年（1968年）に作られた城東地区の卸センターに移転していく。その後、昭和52年（1977年）に駅前に「イトーヨーカドー」が開店すると、<大町>への人通りが奪われることになった。

（5）昭和50年代のモータリゼーションと相次ぐ大型店舗の開店、駅前再開発

昭和50年代に入ると、急激に人々の間に自動車が普及し、人の流れが変わっていく。中心商店街としての<土手町>の勢いは徐々に衰え、相次いで進出してきた大型店に客足を奪われるようになる。そして平成5年（1993年）に下土手町のデパート「カネ長武田」を買収し、新たに城東地区に開店した「ビブレ（現さくら野）」の進出は、町なかから郊外へと商業地を分散させることとなった。

弘前駅前では、昭和50年代から駅前再開発事業が始まり、<大町>でも大幅な区画整理が行われるとともに、平成6年（1994年）にはこの地区に大手スーパーの「ダイエー」が進出した。また、<大町>に隣接する上土手町でも、区画整理事業と都市計画事業が進められ、町はリニューアルされたが、多くの区画が駐車場化していった。商店の移転・廃業も進み、平成6年（1994年）時点で、昭和30年代にあった商店の半数以上がなくなっている。

表3-2は、表3-1の左部分を、以上にのべたそれぞれの出来事と関連づけて整理したものである。

3-2-2 「近郊農村地域」・「新興住宅地域」

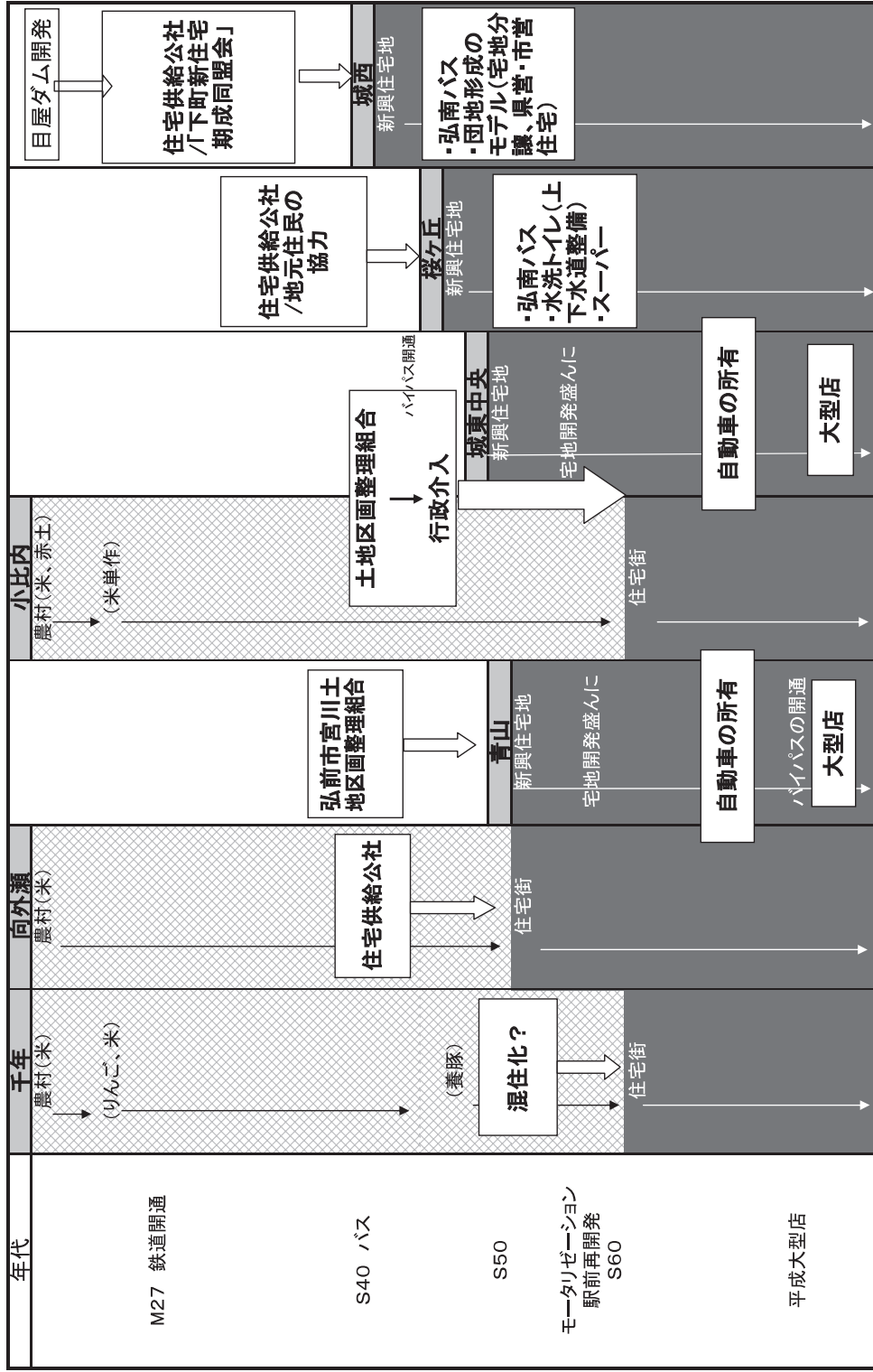
では、他方の「近郊農村地域」や「新興住宅地域」はどのような変化をたどったのであろうか。まず、新興住宅団地の開発の経緯について確認し、こうした開発が農村の生活様式にどのような変化をもたらしたのかという形で順に見ていく。

（1）開発の経緯

多くの他の都市と同様に、弘前市においても戦後の住宅地開発によって、市街地が大きく拡大していく。以下では、本調査で対象とした地域の開発の経緯について、形成されていった順に確認していこう（表3-3）。

「旧城下町」の下町地域は、岩木川の氾濫によってたびたび大きな被害を受けていた。昭和33年（1958年）にも大きな洪水が発生し、多大な被害が生じている。しかし、昭和35年（1960年）に「目屋ダム」が完成したことにより、このような岩木川の氾濫の心配がなくなった。このことから、青森県の住宅供給公社は岩木川の河川敷に広がっていた地区を買い上げ、<城西>団地として大規

表3-3 「近郊農村地域」・「新興住宅地域」の開発の経緯と変遷



模な造成を行った。この開発においては、不整街区形成防止、住宅難解消、下町地区の振興の3つが目的としてあげられている。この団地への入居が開始されたのは昭和40年（1965年）である。これは弘前の郊外地域開発において最も早く計画された団地であり、後に続く団地形成のモデルとなった。

一方、〈桜ヶ丘〉団地は昭和47年（1972年）に分譲が開始されている。ここは県住宅供給公社が市街地の南西側にある地区のりんご畑を買い上げ、住宅団地を造成したものである。〈桜ヶ丘〉には公営住宅もあわせて建設されており、サラリーマンの収入で買える分譲地の供給を前提に開発が進められた。

〈城東中央〉の地区開発は、昭和40年代に第一城東団地土地区画整理組合が結成されてスタートした。この地区では、土地所有者による土地区画整理事業が宅地造成の目的で認可されたのであるが、これは青森県下でも初めてのことであった。のち、〈城東中央〉地区では、昭和49年（1974年）に町会が結成されている。

今回の調査対象地区のなかで最も開発が遅かったのは、〈青山〉の地区である。〈青山〉は昭和50年（1975年）から宮川土地区画整理組合が開発を進め、昭和56年（1981年）以降に住宅地化した。もとは神田宮川町会に属していたが、住民の間で昭和60年代になって町名改正が議論され、平成3年（1991年）に青山町会として正式にスタートした。

（2）「新興住宅地域」の開発と生活様式

「新興住宅地域」が開発された経緯は、そこに居住する住民の生活様式にも少なからず影響を及ぼし、それぞれの地域の特徴を生み出していくことになる。ここではとくに交通や消費圏の変化に注目して、各地区の違いを跡づけておこう。

1) 昭和40年代の開発地域

先述したように、昭和40年代は、弘前市においてバス交通網が大きく拡大していった時期である。このころに形成された〈城西〉と〈桜ヶ丘〉の団地は、バスの利用を前提として作られている。

〈城西〉団地は市営住宅・県営住宅とともに土地の分譲が進められ、住宅団地となった。この最初の町会の設立は、昭和42年（1967年）である。〈城西〉の町会が活動を行うにあたっては、弘前市内では初の新興住宅地とあって、当初、隣接する旧城下地域の「下町町会連合会」に加入し、その運営方法について学んでいったのだという。また、ゴミの収集や街灯・集会所の設置など、生活に関わる問題も多く、町会活動を通してそれらを行政等に訴え、実現していった。また、当初、団地内にはスーパーなども存在し、住民の日常的な消費の場となっていた。しかし、現在では商店などは撤退してしまった。

一方、〈桜ヶ丘〉は、当時としては珍しい水洗トイレが完備されたり、スーパーが団地内に建てられたりして、都会的な生活様式が売り物であった。しかし、この団地もまた、当時拡大していたバス交通網の利用を前提として作られていた。そのために、駐車場をもつ家が少なく、現在ではそれが住民の悩みの種となっている。

2) 昭和50年代以降の開発地域

このような40年代に開発された<城西>や<桜ヶ丘>団地に対して、昭和50年代前後に開発された<城東中央>や<青山>の住宅は、モータリゼーションの進展を受け、自家用車の利用を前提とした車庫や駐車場などがすでに完備された建築の形態になった。また、幅の広い道路も整備された。さらに、このころにはバイパスも開通することとなり、これらの新興住宅地の周辺には、駐車場の利用を前提とした大型店が続々と開店していく。地区の住民はそこで買い物などを行うことが可能になった。日常生活に必要な公共施設のほか、病院や郵便局、銀行といった施設も充実していった。

(3) 農村の変化

こうした引き続き新興住宅の開発の他方で、「近郊農村地域」の生活様式にも大きな変化が生じていた。ここでは農村部での生活の変化について、混住化、交通、買い物・病院の三つに分けて確認していこう。

1) 混住化

弘前市の農村地域でも、戦後は分家が進み、農地を転用した住宅地化が進んでいった。またそこに住む農家の人々の農業形態も、専業から兼業へ、そして場合によっては非農家へと移行していく。

弘前市の南部に位置づく<千年>では「弘南鉄道千年駅」が開通し、早くから徐々に宅地化が進み、混住化が進行していった。これに対して<小比内>は、城東団地が開発された豊田地区に属しており、その開発とともに住宅地化が進んだものである。同様に<向外瀬>も、近辺の新興住宅地(<青山>など)の開発とともに住宅地化が進行していった。そして、こうした形で近郊農村も昭和60年代までには、弘前の都市圏に急速に組み込まれることになった。

2) 交通

農村地域の変容はまた、交通の変化の中にも大きく現れていく。

戦前から戦後にかけての交通手段はもちろん、徒歩が中心であった。のちに自転車や馬ソリなども利用されていくが、基本的に徒歩が移動手段であった状態が昭和30年頃まで続いた。しかし、<千年>では、私鉄の敷設や昭和30年代のバス交通網の拡大により、<土手町>へは電車を利用して、弘前駅前へはバスを利用して便利に行くことができるようになる。<千年>に比べると、<小比内>や<向外瀬>ではやや遅れたが、周辺部の住宅地開発とともにこうした公共交通網に組み込まれていった。そして、昭和50年代以降には、新興住宅地と市街部をつなぐ道路やバイパスが整備されていくのに伴って、モータリゼーションが展開する。自家用車の所有が当たり前になっていった。

3) 買い物・病院

こうした混住化や交通の変化に伴って、買い物や病院の利用といった日常生活で使用する場所も大きく変化していく。昭和30年代くらいまでは、ふだんの買い物は地域の中にある個人商店が主だった。

た。中心商店街である<土手町>は、公共交通を利用して、都市の「ハレ」の場として利用された。また各地域内には病院や診療所がなかったため、農村部の人々は「旧城下町」にある病院に通った(とくに品川町に多かった)。しかし昭和50年代には、こうした状況が大きく変わっていくこととなる。この時期以降の新興住宅地開発では、その近辺に大型スーパーや公的施設などが立地し、中心市街地からの個人病院などの移転も進んだ。こうして急速に近郊農村のすぐ近くに都市的空間が成立していくこととなった。人々は、中心市街地に行くのではなく、郊外で都市的機関を利用するようになる。他方で、この時期にはモータリゼーションが展開し、郊外空間の他、自家用車を利用して、中心市街地をふくめて、好きな時に好きな場所へ自由に行けるようになっていく。

(4) 農村の変容と「新興住宅地域」の形成

こうして弘前市街地の拡大が進んでいくなかで、「近郊農村地域」の人々は住宅地開発の主体にもなりつつ、また同時に、新興住宅地の開発に大きく影響されながら、都市的な生活様式を自らの地に引き込み、自身を変容させていくことになる。とくに昭和50年代以降の新興住宅地開発は、農村部そのものの宅地化を急速に進展させ、とともに自動車交通網の整備、都市インフラ整備、大型スーパーの開店や病院の開業など、都市的生活に必要なものをセットで農村部にもちこむこととなった。こうして近郊農村部では、「新興住宅地域」の形成を媒介に、急速な都市化を体験する。

農村の宅地化はその後も引き続いていった。例えば<小比内>では昭和61年(1986年)に団地造成が開始され、<千年>でもやはり昭和59年頃から平成のはじめまで団地造成が行われていく。農地を手放し、農村内部が住宅地化することによって、非農家が増加する。また、住宅地化した土地を利用して、長男のみでなく次三男が地域内に居住するようにもなっていく。こうして農村独自の都市化がさらに一層進行するが、こうした地域の中でも、いまだに「野菜を買うのは恥ずかしい」という意識があるといい、農村集落の生活様式が多少とも維持されている点にも注意したい。

3 - 2 - 3 小括

以上のように、弘前市の変容に大きな影響を与えた背景として、明治末期の鉄道の開通と第八師団の設置、弘前大学の設置、昭和40年代のバス交通網の拡大、50年代のモータリゼーションと大型店舗の開店や駅前再開発があげられる。これらは各時期に、各町内社会にそれぞれ強い影響を及ぼしたが、その影響はまたそれぞれの町内社会に固有の仕方で現れてもいた。

近代化に伴うこれらのマクロ的な共通要因に対して、各町内社会は独自に反応したのだということができよう。そしてそれは、各町内がそれぞれに独自の性格を持っていたからであり、もともと固有の条件の下にあったことによる。このことは<桜ヶ丘>や<青山>といった新興住宅団地の形成過程についても確認することができ、新しい町内社会といえども固有の性格を持ち、固有の変化を表現しうるものだということができよう。

しかし、交通網の拡大や市場経済の拡大・浸透は、各町内社会がおかれていた制約を取り払い、それぞれの固有の意味を払拭するかたちでも進行した。この差異化と画一化という両義的な過程はまた、ここに暮らす人々にとって、一方で歴史の流れに翻弄される受動的な過程であるとともに、

また他方で人々が自らの生活を自ら変更していく主体的な変革過程でもあった。

これらのことをふまえつつ、次に、各地域で生活していた人々の視点から、同じプロセスを再検討してみよう。その中でとくに、この最後の主体的変革過程の内実を、より鮮明に浮き彫りにしていきたいと思う。

3-3 都市の変遷と個人のライフコース

ここでは16名のインフォーマントの生活史を取り上げて、次の3つの分析を行う。第一に、現在4地区に居住する人々がどこから来たのかという点である。都市部にはたえず一定の流入層があり、人々は居住地を変えてきている可能性が高い。まずは、4地区ごとに住民の居住地の変遷の特徴を検討する。第二に、4地区の人々は現在の居住地に到達する以前に、弘前の他の場所をどのように利用してきたのか、あるいは利用してこなかったのか。ここでは、居住地と学校・職場の変遷と弘前の都市空間との関連について検討を行う。第三に、4地区の居住者の親やきょうだい、子供のライフコースはいかなるものか。それは弘前という都市の変化とどのような関連があるのだろうか。第2節にひきつづき、今度は都市住民のファミリーコースの検討を行っていく。

3-3-1 居住地の変遷

まず、弘前の都市住民はそれぞれどのように居住地を移動してきたのだろうか。先に設定した「旧城下町」・「近郊農村地域」・「明治発展地域」・「新興住宅地域」の4つの地域区分ごとにみていこう。

図3-6は現在、「旧城下町」に居住するインフォーマントの、生まれてから現在までの居住地の変遷を図式的に表したものである。縦の時間軸は、先の弘前市の変容をふまえて時期区分した。

のあるところがその時点でのインフォーマントの居住地を表す。1本の線が1人のインフォーマ

図3-6 「旧城下町」の居住者の居住地変遷

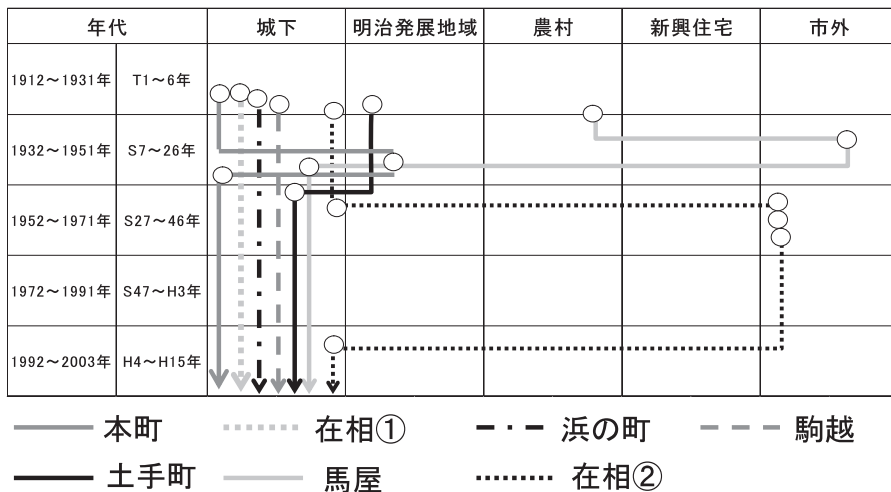


図3-7 「近郊農村地域」の居住者の居住地変遷

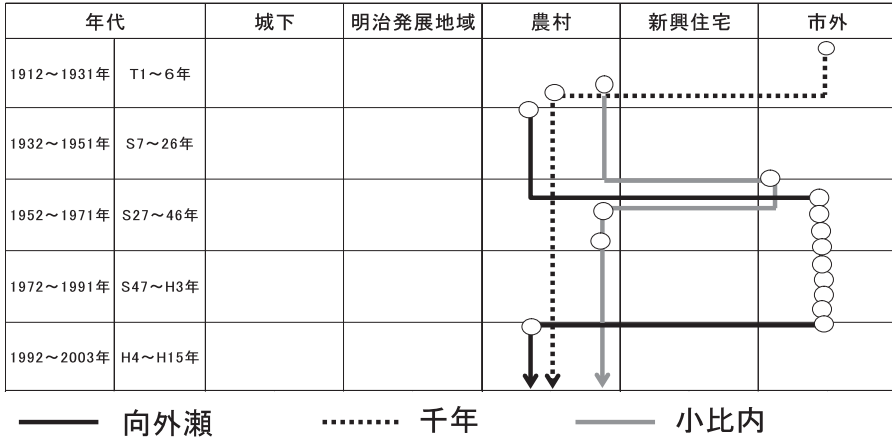


図3-8 「明治発展地域」の居住者の居住地変遷

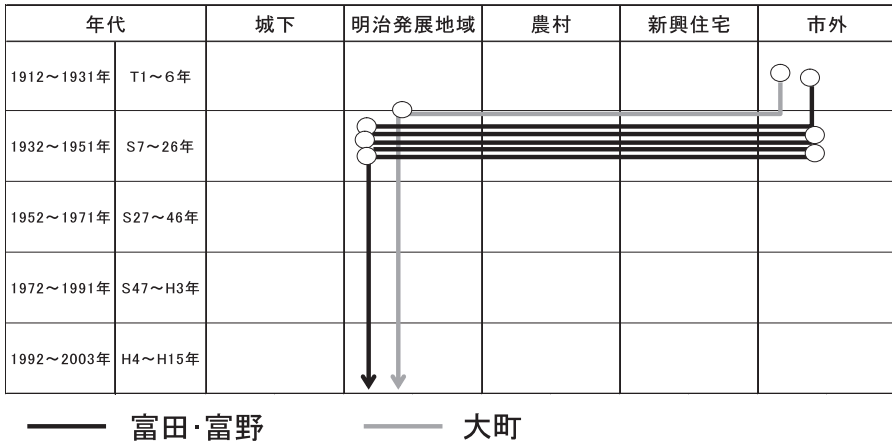
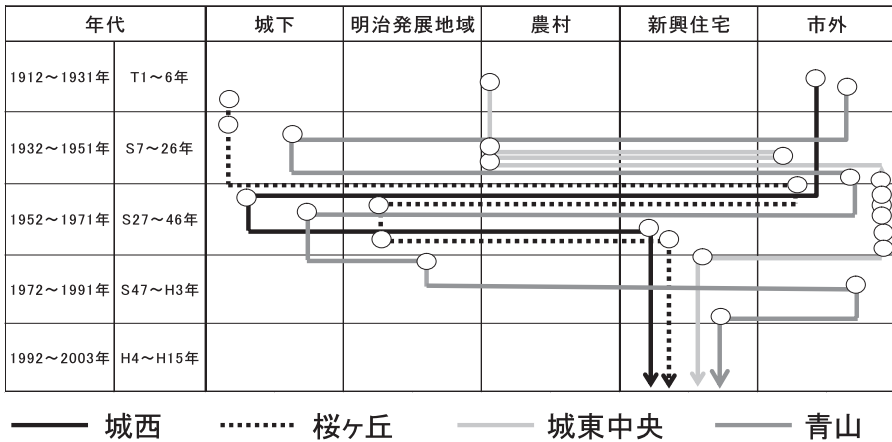


図3-9 「新興住宅地域」の居住者の居住地変遷



ントの居住地の変遷を表し、線の始点の位置がインフォーマントの誕生地、終点が現在の居住地となる。

(1) 「旧城下町」：「定住」と「Uターン」(図3 - 6)

現在、「旧城下町」地域に居住しているインフォーマントの居住歴には、大きく分けると二つのパターンが見られた。まず、その地域（この場合は「旧城下町」の地域）で生まれ、現在まで居住地が変わらないケースである。これを「定住」のパターンとする。図の在府相良町は、〈在府・相良町〉で誕生し、就学し、就職した。このように、居住地が誕生から現在まで移動していない「定住」パターンをこの地域の一つの典型として抽出しうる。

もう一つは、その地域で生まれ、一度は市外に居住地を移しながら、最終的に誕生地であるその地域に戻り、現在そこで暮らしているという「Uターン」のケースである。在府相良町は、〈在府・相良町〉で誕生し、就職してからは転勤を繰り返して誕生地を離れていたが、最終的に誕生地に戻ってきて、現在に至っている。多少のブレはあるが、基本的に「旧城下町」のインフォーマントは、この「定住」か「Uターン」かのいずれかに分類された。

(2) 「近郊農村地域」：「定住」と「Uターン」(図3 - 7)

「近郊農村地域」の住民にも、居住地に関してみると、「旧城下町」のそれとほぼ同じ動きを認めることができる。

図には3名の居住地変遷が示してあるが、このうち「定住」は〈千年〉のインフォーマントに認めることができる。この人の場合はたまたま県外で誕生しているが、父親の仕事の都合で一時的に県外に出ていたもので、その後は一貫して〈千年〉で過ごし、実質的には「定住」である。残りの2人は一時的に市外に移動したのち戻る、という典型的な「Uターン」であった。

このように、藩政時代から続く町内では、町にせよ村にせよ同じように、そこに現在暮らす70歳代の人々には「定住」と「Uターン」が見られた。このことが示す意味は、家を継ぐということと密接に関連していることが予想され、これについては後述する。もっとも当然のことながら、ここでの「土着」志向が、そのまま先祖代々この場所に住み続けていることを意味するものではない。この点も後で触れることになる。

(3) 「明治発展地域」：「参入」(図3 - 8)

図3 - 8に見るように、「旧城下町」や「近郊農村地域」とは対照的に、「明治発展地域」に現在暮らす2名のインフォーマントは「参入」型を示した。いずれも県外で生まれ、幼少期に親とともに弘前に参入している。今回調査対象とした人々の親の世代が、この地域の形成に大きく関わっており、現在暮らしている人々の多くが、その第二世代であることが見て取れる。

しかし、これらの「参入」型は、参入した後は、上記の「旧城下町」・「近郊農村地域」と似たパターンを示しており、〈大町〉に居住するインフォーマントの場合は「定住」、〈富野町〉に居住するインフォーマントには「Uターン」を考えることができる。

以上のように、明治・大正期までに形成されたこれらの地域で現在生活している人々の基本的な居住歴のパターンは、「定住」か「Ｕターン」であることが分かる。明治末の町の形成に関わって、「明治発展地域」には当然「参入」型が見られるけれども、これも「定住」に近いものと考えられる。

これに対して「新興住宅地域」では、これまでとは全く異なる新しい居住地の遍歴を認めることができる。それは「循環」型ともいべきパターンである。

(4) 「新興住宅地域」：「循環」(図3 - 9)

「新興住宅地域」は、対象としたインフォーマントたちが40歳から50歳代の頃に開発された地域であり、ここで現在居住する人々は、当然、住宅開発以降に「参入」したことになる。図3 - 9より居住地の変遷をみてみると、まず、いずれもきわめて移動が激しいことに気づく。誕生地は、今回の4名の場合、2名が市内出身、残り2名が市外の出身であった。その後、市内・市外問わず数度の移転を繰り返し、それぞれの住宅団地の形成期に現在の場所に参入した(参入以降は定着)。このうち、市外から参入した人々は、先の「明治発展地域」と同様に「参入」型と言うこともできるが、ここでもむしろ現在に至るまでの「循環」型ともいいうるパターンに注目しておきたい。

おそらく、ここから次のように指摘することができる。「旧城下町」の出身者、あるいは農村出身者のうち、何らかの形でそのまま居住地に「定住」ないしは「Ｕターン」できなかった場合、市内・市外を巡回し、居住地を転々とすることとなる。しかし最終的に郊外型住宅団地に終の棲家をえて、現在に至っているのである。市外出身の「参入」型も同様に、いきなり「新興住宅地域」に定着したのではなく、「旧城下町」や「明治発展地域」に居住した後に数度の移転を経て市内・市外を循環し、最終的に郊外型住宅団地に終の棲家を得たと見ることができる。こうした点で、ここに暮らす人々の居住地の変遷には一定のパターンを確認しうる。

以上をまとめると、「旧城下町」と「近郊農村地域」には、居住地が誕生地域から移らない「定住」型と、一度移動した後誕生地域に戻ってくる「Ｕターン」型がともに見られ、現住地に至る移動のパターンには共通性が見られる。今回のインフォーマントの年代では、家を継いでそのまま残るか、いったん外に出てもう一度もどって家を継ぐか、いずれにせよそうした形で、それぞれの町内社会の成員の核が作られていると想定することができる。

これに対し当然のことながら、「明治発展地域」と「新興住宅地域」では、多くが「参入」型になる。しかし、「明治発展地域」と「新興住宅地域」では参入の時期が異なり、前者はインフォーマントの親の代に参入しているのに対し、後者ではインフォーマント本人たち自身によって参入が行われた。加えて、「新興住宅地域」に暮らす人々には、「循環」とも言える弘前内外の激しい移動という特徴が見られ、これは市内の他地域在住のインフォーマントには見られないものである。

以上は居住地の移動にのみ焦点をおいた分析だが、以上の分析にそれぞれのインフォーマントの学歴・職歴を重ねて、さらに分析を進めてみよう。

3 - 3 - 2 ライフイベントと都市利用

ここでは調査対象としたインフォーマントの中から、各地域の移動パターンを代表する事例をいくつか取り上げて紹介し、分析を行うこととする。ここで取り上げるのは以下の6名である。前節では居住地の変遷のみに焦点を絞って分析したが、ここではさらに各個人の生活史上における移動の意味、とくに学校と就業の遍歴との関連に焦点をあてて検討する。

「定住」型：「旧城下町」・ < 駒越町 > 居住の A 氏、「近郊農村地域」・ < 千年 > 居住の B 氏

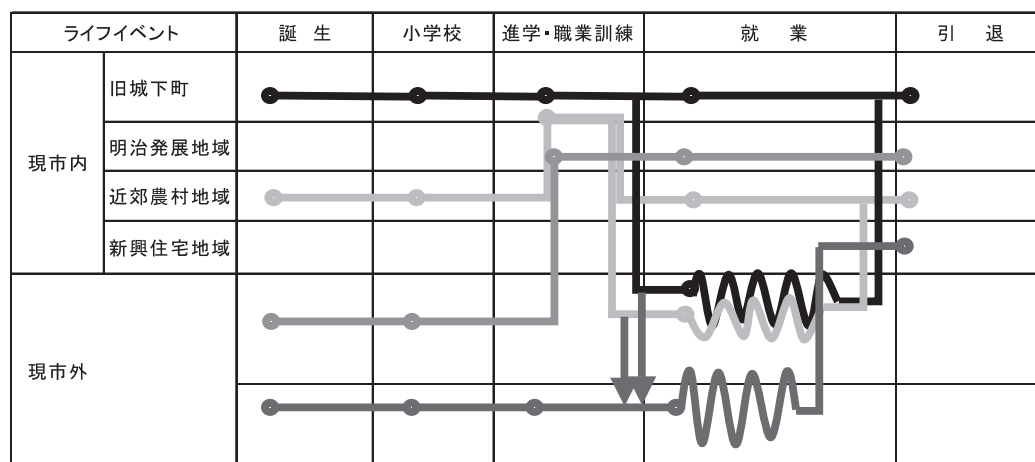
「参入」型：「明治発展地域」・ < 大町 > 居住の C 氏

「Uターン」型：「近郊農村地域」・ < 小比内 > 居住の D 氏

「循環」型：「新興住宅地域」・ < 城東中央 > 居住の E 氏（「近郊農村地域」出身）

「参入＝循環」型：「新興住宅地域」・ < 城西 > 居住の F 氏（県外出身）

図3-10 ライフイベントの模式図



(1) 分析の方法

調査では、学歴・職歴を中心にして、各インフォーマントの生活史の聞き取りを行っている。データの分析にあたっては、各インフォーマントの生活史に共通して現れる「ライフイベント」に注目した。ここではこのライフイベントとして、「誕生」「小学校」「進学・職業訓練」「就業」「引退」の5つに注目し、それぞれのイベントを「どこで」迎えたのかに焦点をあてて分析を行った。

「誕生」：生まれた場所である。インフォーマントの誕生地はその親の居住地や就業地とほぼ同一であった。

「小学校」：上述のように、今回取り上げた調査対象者は、大正5年（1916年）から昭和7年（1932年）の間に生まれており、皆戦前の教育課程なので義務教育は小学校までである。

「進学・職業訓練」：進学・職業訓練については、小学校卒業後、進学する場合があるほか、進学せずに親の手伝いや店の住み込み等を通じて働きながら職業訓練を行う場合があった。

「就業」：以上の遍歴を経て就業にたどり着く。就業は一つに限らず、いくつもの職を転々とする場合がある。

「引退」：インフォーマントの多くは年齢的にすでに引退を迎えている。なお農家などの場合は年齢を重ねても仕事を継続して行っている場合もあるが、ここでは「引退」として扱っている。

各インフォーマントが、こうしたライフイベントを、弘前の都市空間のどこを利用しつつ、その生活史を組み上げていったのか。その結果を模式的にまとめたのが、図3 - 10である。

模式図の作成にあたっては、前項とは異なって今回はライフイベントに注目するため、時間の経過については、ライフイベントでそろえて分析を行った。また場所についても、ここでは居住地ではなく、そのイベントを行った場所に注目した。すなわち、「誕生」から「引退」までの生活上のイベントを、都市内外のどの空間を活用して過ごしていたのかを図示化していくこととした。

(2) 分析結果

では、その分析結果について、順を追ってみていこう。

- ・「定住」型：「旧城下町」・<駒越町>居住のA氏、「近郊農村地域」・<千年>居住のB氏
まず定住型である「旧城下町」・<駒越町>のA氏、「近郊農村地域」・<千年>のB氏である。

A氏は昭和9年(1934年)に、祖父の代から続く酒屋の二男として、「旧城下町」・<駒越町>に生まれた。A氏は、同じく「旧城下町」にある尋常小学校に進んだ後、さらに旧制中学校、師範学校、新制弘前高校へと進学した。いずれも「旧城下町」の地域にある学校である。高校卒業後、兄が亡くなったため実家の酒屋を継ぐことになり、大学には進学せずに、19才で家業を継いで現在に至っている。このように「旧城下町」・定住型の生活史は、全てのイベントを「旧城下町」の地域内で迎えている点に特徴がある。

「近郊農村地域」・定住型の生活史は、「進学・職業訓練」期にやや移動があるほかは、「旧城下町」のそれと同じである。「近郊農村地域」・<千年>在住のB氏の事例をみてみよう。B氏は昭和3年(1928年)秋田県で長男として生まれた。B氏の父親が仕事の都合でたまたま県外にいたからであるが、父親の実家はもともと<千年>にある農家であった。B氏が5歳のとき、父親が都合により実家を継ぐことになり、一家で<千年>に戻ってきた。B氏はこの<千年>の尋常小学校に進んだが、農村地域である<千年>にはその後の進学先はない。そのため「旧城下町」にある高等小学校に進み、徒歩で通った。卒業後は<千年>で実家の農業を継いでいる。

- ・「参入」型：「明治発展地域」・<大町>居住のC氏

つぎに、「明治発展地域」に親の代から移り住んだ参入型の事例についてみていきたい。「明治発展地域」・<大町>居住のC氏は大正6年(1917年)に秋田県合川町で生まれた。当地で尋常小学校、高等小学校に進んだ後、昭和7年(1932年)に家族で<大町>に移り住んできた。父親が弘前駅前の<大町>でタイヤ会社をはじめ、C氏は父親の仕事を手伝った。タイヤ会社では当初は馬車や人力車のタイヤ修理を主な仕事としていたが、昭和50年代のモータリゼーション以降は自動車の

タイヤの販売を行うようになった。長男であったC氏は父親のタイヤ会社を継いで社長となり、現在に至っている。

以上、ABCの各氏に共通するのは、定住にせよ、参入にせよ、いずれも親の生業を継いでいる点である。とはいえ農村地域はともかく、「旧城下町」でも明治以降はとくに居住者の入れ替わりが激しく、何代も続くような家や店はむしろ稀であるから、親の代ではなくても数代前からの定着にすぎない。だが、都市内部の空間を、その時代にあった商売を可能にする空間として活用し、それを継嗣していく過程という点から見れば、「旧城下町」の「定住」型と「明治発展地域」における「参入」型は同じ性格のものとして見ることができる。仕事の内容にもそれが見て取れよう。A氏の酒屋は、明治初期頃の都市における興業の典型であるし、他方、<大町>のタイヤ屋は明治以降の駅前の発展に伴って必要とされた職種であり、秋田県からの商店の参入はこの時期の弘前駅前開発に典型的である。C氏は親の後を継いでいるもののまだ2代目で、A氏の家に比べると市内の生業としての歴史が浅いということにすぎない。また近郊農村である<千年>の農業も、藩政時代からの継嗣によるが、B氏が一時試みた畜産は、高度経済成長期に開発された新しいタイプの農業とすることができるし（後述）、そもそも<千年>の農業の典型であるリンゴは明治末頃から都市近郊農村に展開された近代農業の先駆である。このようにそれぞれの家々で、都市空間を活用しながら、その時代を生き抜くための仕事を開発し、継承してきた過程を、これらの生活史の中から読みとることができよう。

これに対し、「近郊農村地域」・Uターン型のD氏、「新興住宅地域」に在住の参入＝循環型のE氏の事例は、こうした継承の過程から完全にはずれたものとなっている。

・「Uターン」型：「近郊農村地域」・<小比内>居住のD氏

D氏は昭和6年（1931年）、<小比内>の農家の次男として生まれた。D氏も先のB氏と同様に「近郊農村地域」の小学校を卒業、その後は「旧城下町」の教育機関に進学している。ただしD氏の場合は家を継ぐことはなく、自衛官となり、のち転職して「弘南バス」に勤務した。この間、市内・市外を転々と移動したが、バス会社を退職後、生家のある<小比内>に家を建て、現在に至るまでずっとそこに居住している。

・「循環」型：「新興住宅地域」・<城東中央>居住のE氏（近郊農村出身）

「新興住宅地域」・<城東中央>に居住するE氏は、昭和7年（1932年）、D氏と同様に<小比内>の農家の次男として生まれた。小学校とその後の進学先における「旧城下町」の利用の仕方は、A氏、D氏と同じである。また就業先もD氏と似て家を継ぐことはなく、海上保安庁・海上自衛隊に勤務して各地を転々とした点も同様である。D氏との違いは、自衛官退職にあたって当時宅地造成がなされていた「新興住宅地域」・<城東中央>地区に住居を構えたことである。E氏は現在に至るまでここに住んでいる。

「近郊農村地域」在住のD氏と、近郊農村出身で現在「新興住宅地域」在住のE氏の生活史の比

較は、近郊農村における家の継承、および現段階における近郊農村の位置づけを示唆していて興味深い。

近郊農村においては（おそらく「旧城下町」においても同様の事例を見出すことができると思われるが）家業は長男が継ぐため、次三男以下は学業を修めたのちは何らかの形で都市的生業につくことになる。今回のインフォ・マントたちの間では、ここで見たような自衛官の他、公務員、教員、公共交通機関など都市インフラに関わる企業に勤める例が多かった。また近郊農村という利点を活かして、「旧城下町」内に存在する、より高度な学校の利用も、第2節で検討したような周辺地域（非都市部）の他の農村と比べて特徴的である。就職後、彼らはサラリーマンとして市内・市外を転々とするが、退職の前後に終の棲家を得る際に、二つの選択肢が見られた。一つは生家のある近郊農村で土地を分けてもらい、分家のような形で住居を得る場合と、生家に近い新興の住宅団地に住宅を確保する場合とである。後者も、E氏の場合のように、新興住宅団地の分譲に生家が関わっており、D氏とE氏の違いはただ、現在の地域の所属が生家のあった町会か、別の町会かということだけである。この場合、「新興住宅地域」は次三男の新たな分家の場として機能しているとも言えるし、逆に近郊農村が「新興住宅地域」として活用されているとも言えることができる。

・「参入＝循環」型：「新興住宅地域」・〈城西〉居住のF氏（県外出身）

最後に、県外から市内へと参入し、かつ市内を循環しながら最終的に「新興住宅地域」に居住地を構えた〈城西〉に在住のF氏の事例を見てみたい。

F氏は昭和2年（1927年）、秋田県旧花輪町で、三男として誕生した。生家は米屋であった。F氏は、当地で小学校・中学校に進学し、戦中に学徒動員に出たが、終戦後花輪にもどり用品店を始めた。仕入れの関係で問屋のあった弘前にも出かけ、弘前で配偶者を得ると、昭和30年（1955年）には妻の血縁をたよって弘前市の「旧城下町」地域に転入し、地域内の酒屋に勤めるようになった。その後、駅前の市場に昭和62年（1987年）まで勤めた。この間、F氏は〈城西〉団地に入居し、仕事を引退後もそこで暮らし現在に至っている。

「明治発展地域」に居住するC氏が父親の事業の開業に伴って参入し、かつその事業を家業として継承して現在に至っているのに対し、F氏の場合は弘前市街地を雇用先として利用している点に大きな違いが見られる。戦後に弘前市に入ってきたF氏の場合は、家業という形で自分の仕事を開発したわけではないので、子どもが同じ仕事を継ぐということはない。また職住分離の形で居住地を新興住宅団地に選択することもできた。他方で、F氏は「Uターン」型のD氏や「循環」型のE氏とも異なり、純粋なサラリーマンというよりは、仕事を進めるなかで得られたネットワークを活用しながら都市内に参入・就業し、〈城西〉への定着にもそうした知り合いとの関係が想定される。こうした雇用形態はD氏やE氏よりも年齢がやや高いことに起因していると思われる。

（3）小括

以上から得られた知見を整理しておきたい。

第一に、ここでは都市空間を構成している町内社会のモザイクを確認した。都市の構成員は常に入れ替わっており、とくに非農村部は商工業の栄枯盛衰の中で町の形を大きく変えている。しかし、各町内社会のモザイクは生きて再生産されており、町々の「格」や気質にも反映され、それらの上に新しい参加者が新しい町の形を与えていると考えられる。

こうした都市の姿は、マクロな変容の過程の中にあり、弘前という都市の場合、藩政奉還と明治維新、鉄道と駅の設置、軍隊の設置、大学の設置が重要な契機となっている。最近ではモータリゼーションと大規模店舗の進出が大きい。しかし、こうした都市の変容は、他方で個人々の生活を通じて実現されたものでもある。個人々は生活の中で自分の仕事や居住地を選んでいくが、そこではそれぞれの選択にあった町内社会が選ばれるのであり、こうした主体的な選択が都市の空間構造を再生産し、また再編成してきたとも言える。

以上の中からさらに続けて、こうした個人と町内社会、そして都市空間の関係性を読み解くために必要と思われる視点を抽出するなら、まず重要と思われるのは「親からの仕事の継承・非継承」の問題である。

各個人はそれぞれの親の元で生まれる。親の仕事や居住地は、本人の生活史を決定するもっとも大きな因子である。学歴に関しては、今回の事例で見るとそれぞれの状況でそれなりに機会を与えられている例が多かった。インフォーマントはいずれも親が居住する地域で誕生し、近隣の小学校へと進む。さらなる「進学・職業訓練」にあたっては、都市近郊農村の場合、都市の機関を活用する事で可能である点が、第2節でみた調査地域とは異なっている。さらに就業の選択にあたっては、こうした学歴以上に、親の仕事を経くか継がないかが重要であり、結果的に、長男として生まれたか、次三男として生まれたかが、その後の人生に大きな影響を及ぼしている。少なくとも、今回対象とした現在70歳代を中心とする都市居住男性層には、こうした家業の継承の有無が決定的である。

振り返るなら、市内で親の生業を継ぐことができたA・B・C各氏の事例に対し、D・E氏は親の生業を継がず、就業にあたって別の地域を転々としたのだと説明できよう。加えて弘前の場合、都市内の産業規模が大きくない分、公務員や教員などを除けば、こうした循環層も成立は難しかったであろう（今回の事例ではともに自衛官だった）。ただし、この親の生業を継ぐ・継がないということに関連させて次のような示唆はできる。都市内部で成立している家業は、それぞれの町内社会が都市成立当初から持ち続け再構成してきた固有の機能・固有の性格に基づいて成立しており、家々は家業の存続・切り替え・場所替えを通じて、その町々で生き抜くことを可能にしてきたし、こうした家々の家業の栄枯盛衰を通じて、町内社会の固有の機能や性格は持続されてきた。例えば、商売の仕方一つにしても、売るものや価格が異なり、商売の相手が異なっていた。明治以降の様々な都市の変容の中で、都市に新たな機能が付加され、町が形成されるが、そうした町内社会の成立維持発展の過程は、個々の家業の成立と継承の過程でもあったのである。こうした家業の継承から漏れた層はそれ以外の職を求めねばならなかったが、戦後、とくに昭和30年代以降は都市の成長・発展の中で多様な職種が生み出され、かつ「新興住宅地域」の開発とモータリゼーションの進展によって、近郊農村の中で、あるいは郊外住宅地の中で、その居住地は確保されてきたのであった。

このようにして弘前という都市の空間的・人口的膨張は進行してきたが、現段階にいたっては、今回対象としたインフォーマントたちの次の世代への家業の継承が難しい状態にあることが予想される。このことは戦後も継続されてきた町内社会の存続にも関わることであり、都市が固有の機能を担う町内社会の複合体であるという本来の形を失いつつあることを暗示するものでもある。この点について、弘前市居住者のファミリーコースを取り扱いながら、確認していきたい。

3 - 3 - 3 弘前市居住者のファミリーコース

前項までは各地域の移動のパターンと、それを代表するようなインフォーマントの移動の事例を取り上げて紹介し、分析を行ってきた。最後に、第2節で明らかになった周辺地域（非都市部）の人びとのファミリーコースとの比較を念頭に置きながら、弘前市居住者のファミリーコースについて検討する。対象としては、前節でも参照した、「旧城下町」のA氏の家族、「近郊農村地域」のB氏の家族、それに新しく、「明治発展地域」のG氏の家族と「新興住宅地域」のH氏の家族の4つのファミリーコースを取り上げる。それぞれについて、親世代・本人世代・子世代の職業と移動、および生活状況などを本人のライフヒストリーや地域の様子も含めてやや詳細に紹介しつつ、ファミリーコースについて論じ、最後に若干の検討を行いたい。

なお、ここでも第2節と同様に、聞き取りのデータからファミリーコースの図を作成した（図3 - 11~14）。おおむね第2節と同様で、横が各地域を表し、縦が年代を表している。一本の実線が一人を示し（妻は破線）、親世代は赤に、本人とその配偶者、兄弟姉妹は青色に、子世代は緑色に、孫については黒に色分けして示している。図には主なライフイベントと居住場所についても、聞き取りで把握できた範囲で示した。

（1）「旧城下町」・＜駒越町＞A家（図3 - 11）

A氏は昭和9年（1934年）生まれの69歳であり、＜駒越町＞で祖父の代から酒屋を営んでいる。

1) ＜駒越町＞の概要

「旧城下町」に分類される＜駒越町＞は、もともと主に岩木町から農家の次三男などがやってきて商売を始めたり、町で丁稚奉公をしたりしていた地域であった。郡部や近くの町衆を相手の商売が盛んであり、商人・職人の町として栄えた。昭和30年（1955年）ごろには60軒の商店が軒を連ねていたという。＜駒越町＞の大通りは地方主要県道として早くから舗装され、A氏が物心ついたころには車道はコンクリートになっていた。昭和10年代からタクシーも走っており、30年代にはバスも走っていた。また昭和33年（1958年）に岩木川の氾濫で＜駒越町＞が大きな被害にあったことで地価が下がり、それを機に流入して来た人も多くみられたという。しかし、本格的に自家用車が普及し、値段の安いスーパーが郊外に増えていくとともに、商店の客足は減り、商店の数もめっきり減少していった。

現在は、82世帯200人ほどが住んでいて、その3割は高齢者である。その半数は岩木町出身者やその子孫で、7割は戦後の流入者であるという。仕事では自営業とサラリーマンが半々で、市の職

員なども多い。サラリーマンの職業についている人には、職人や商人の子どもが多い。むしろ自営業の人のほうが地元生まれではない傾向もみられているという。

2) 親世代

A氏の親世代について述べる前に、酒屋を起こした祖父母の世代の話をしておきたい。A氏の祖父は明治10年(1877年)に樋ノ口(現弘前市)にある、農家の次男として生まれた。成長してからは弘前市の<土手町>にあった荒物屋(日用品等を扱う)に丁稚奉公に出された。その後そこで暖簾分けはされずに、油屋(菜種油の行商)を自分で起こした。「明治20年頃まだこの辺は電気ねえの。で、その油売りながら世間話して、一種の新聞のような働きをしてたんだな。」次に酒屋を始めた。祖父は弘前市内の女性(A氏の祖母)と結婚したが、祖母は長男であるA氏の父親を生んで他界した。よって父親は一人っ子で兄弟がいなかった。

A氏の父親は明治32年(1899年)に<駒越町>に生まれた。岩木町の葛原に住む農家の娘と結婚する。しかし昭和16年(1941年)に他界した。そして、このA氏の母親もその1、2年後に亡くなっている。A氏の祖父はずっと長生きし、昭和40年頃に亡くなった。

3) 本人世代

A氏は、2男2女の次男として生まれる。A氏の兄である長男は大正10年(1921年)に生まれ、旧制中学卒業後、家業を手伝っていたが、軍隊に入ることが決まった直後、21歳で病死する。長女は弘前市内に、次女は三戸に嫁いだ。

A氏自身は、昭和9年(1934年)に生まれ、昭和16年(1941年)、小学校に入学する。そのときは小学校は「国民学校」であった。市内の中学校に入学したが、翌年青森師範学校附属中学校が設立されたため、編入。新生弘前高校を経て、東京都内の大学に合格する。当時、商店街である<駒越町>では高校に入った人は半分もいなかったという。「そりゃ大学出で商売やればもっといいと思うんだけど。そういうんじゃないよ。要するに、今でもそうだけど、小さい商人、農・工・商つうのはね、人手いるわけよ。学校さ仕込んでる時間無いの。昔は全部人力だからさ。」父も兄も亡くなっていたため、代わりにA氏が酒屋をつがねばならなくなった。「家族を継ぐために、涙を飲んで。ただし、あの、一回しか行がねけど、大学さはいったんだけど。行がねんだ。」と、泣く泣く向学の志を捨てた。昭和28年(1953年)ごろであった。昭和30年(1955年)に結婚。妻は昭和11年(1936年)に平賀町の比較的裕福な農家に生まれた。平賀高校を卒業後、すぐA氏と結婚した。

まだA氏が小さかった昭和18年頃には、学校に弁当を持っていけない子供が半分はいた。そのころにA氏は、母親が岩木町の農家であったため、「米でも何でも十分貰って、ちゃんと白いまま」の弁当を持って行くことができた。A家の暮らしは、「5段階にせば4段階くらいんどごにいだんで、ひもじい思いもしたことないし、何もなくて」という。その後、<駒越町>ではまだトラックなどの購入が多いなかで、A氏は、昭和35年(1960年)に大型の自動二輪を、またいち早くその5年後に中古のクラウンの乗用車を買っている。バイクでは「青森まで行ったりしましたねえ、皮ジャン着てな。」

4) 子世代

A氏は、1男1女をもうけた。昭和33年(1958年)に長女が誕生した。長女は市内の高校、短期大学を卒業し、会社勤めをしている。弘前市内に嫁いだ。長男は、市内の工業高校を卒業後、東京の専門学校に行き、そのまま東京で就職した。しかしほどなくして帰郷、その後五所川原市にある酒の卸屋に10年ほど勤務した。そしてコンビニエンスストアの本部に勤めるようになった。長男は2、3年前に五所川原に土地、建物を取得したので、そこから通勤している。今のところこの酒店を継ぐ者は、「なし。まあ長男が仕事辞めて来るとは思えないねえ。五所川原に住宅あるし。ま、どうなるがわかんねえけど、今んどごは継ぐべき人がいねえ。」という。

結局、本人は、親の代からの自営業をひきつのだが、子どもは別の仕事につき、他出しているのである。

(2) 「近郊農村地域」・<千年> B家 (図3 - 12)

B氏は75歳であり、旧千年村の小栗山地区で代々農家を営んできた家系である。

1) <千年>の概要

「近郊農村地域」にあたる旧千年村は、明治22年(1889年)に6つの村が合併して誕生し、昭和30年(1955年)弘前市への合併と共に、千年地区となった。生業は田畑が中心であり、とくに明治23年(1890年)ごろに秋元多吉によってりんごの植樹が開始されて、のちに千年地区の主要産業のひとつとなっていく。もっとも現在ではりんごの価格が下がり、後継者も少ないため、りんご農業の担い手はほとんどが高齢者である。若い世代の人々の多くは村外に勤める傾向にある。

昭和43年(1968年)ごろから20年間ほどは、とくに地区内の松木平・清水森・小栗山を中心として、養豚業が盛んになった。養豚の儲けでりんごの肥料などをまかっていたし、出稼ぎに行く必要がなくなったという。しかしそのうち立ち行かなくなり、現在では養豚は行われていない。

現在、<千年>は10町会から構成されており、戸数は2,618戸ある。この50年で戸数は倍近く増加した。もともとはりんご畑や田畑であったのが、20~25年前ほどから団地やマンションなど、一気に住宅が広がっていった。現在の人口の内訳は、よそから来た人7割、古くから住む人3割ほどであるという。B氏の住む小栗山地区では農家は約175戸で、そのほとんどが10アール未満の田畑を所有しているにすぎないという。

2) 親世代

B氏の父親は、明治39年(1906年)、千年村小栗山に生まれた。弘前市内の工業高校を卒業ののち、秋田県庁にて7年ほど働く。そのとき角館に下宿をしており、その娘と結婚する。そして父親が26歳、B氏が5歳のとき、実家の農業をつぐために小栗山へと舞い戻る。しかし、父親は「やっぱり自分で工業出てるどごで、農家だどごで、子供には百姓させるって気持ちしかねえだな」と、子どもに農業を託したようである。父親自身は30歳目前という若さで町内会長になったり、農業委員会の会長なども勤めたりして、村の発展に力を入れた。「役場にいてみんな、事務は取らねえけ

図 3-11 「旧城下町」・<駒越町>A家移動図

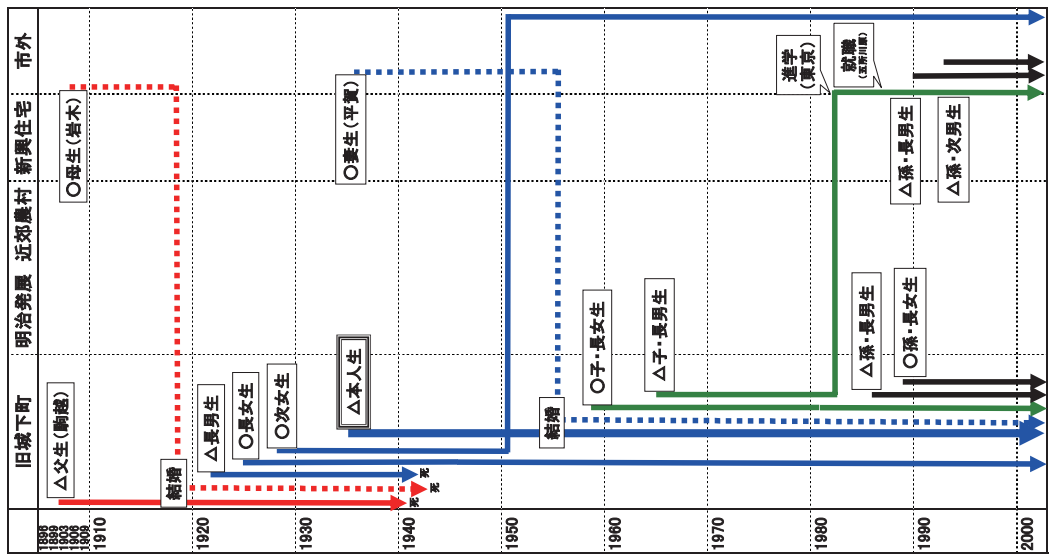


図 3-12 「近郊農村地域」・<千年>B家移動図

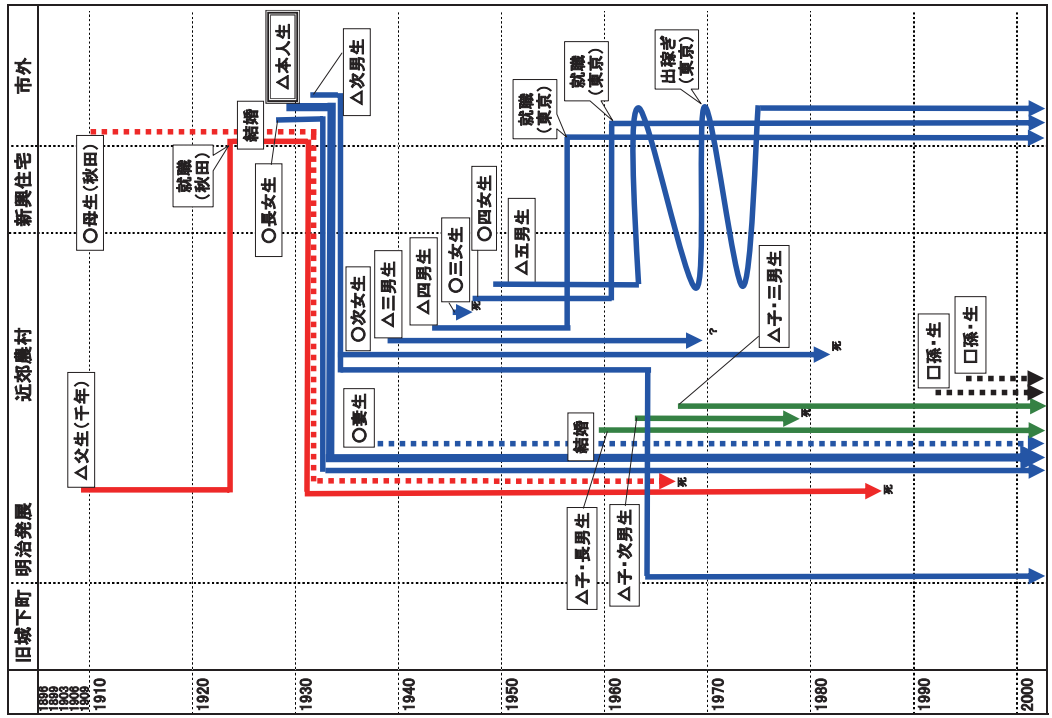


図 3-13 「明治発展地域」・〈富野町〉G家移動図

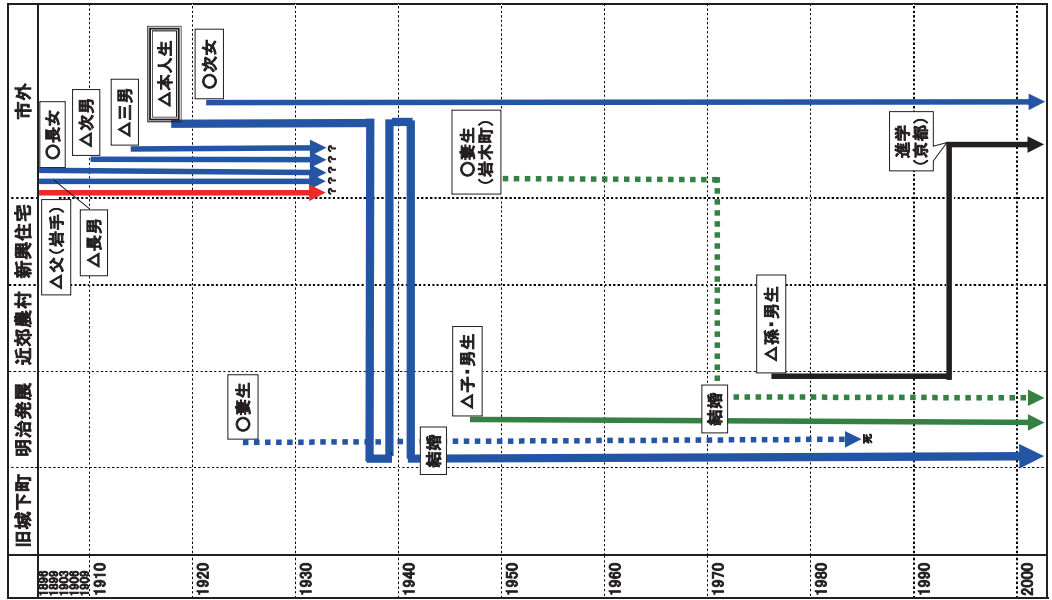
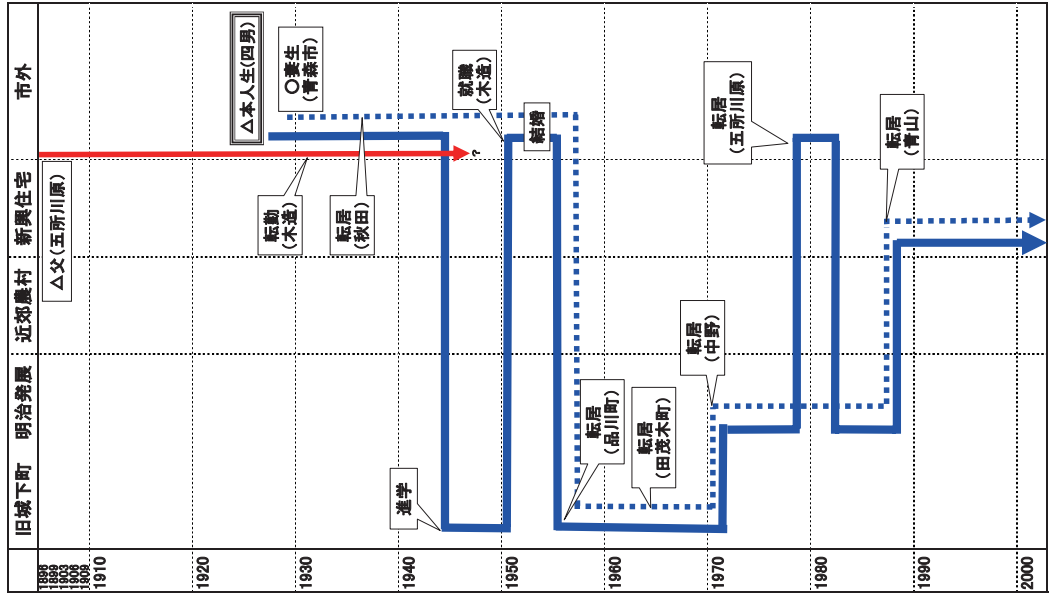


図 3-14 「新興住宅地域」・〈青山〉H家移動図



ども、それそうやって生きにゃあまね、これはこうやってやんにゃあまねって、ただ役場においてホラ吹いて、月給一銭も貰わねえで暮らしたの。」

B氏の母親は、明治43年（1910年）に生まれ、57歳で死去した。母親もあまり働くほうではなく、戦時中も女中を雇って働かせていたという。「何も農業やれねえでよ、オラ母親さ農業の仕方知らへただよ。自分の母親さの。ま、そういう人ってねえびょん。オラはただ学校さ入った時、孫ばあさんについて、農業の仕事覚えていったとごで、祖父もあんまり農業やらねえしよ、ただ遊んで暮らして。」祖母が畑仕事を一手に引き受けており、そのあとB氏が受け継いだのである。

3) 本人世代

B氏は昭和3年（1928年）に9人兄弟の2番目、長男として生まれた。父親が家計を省みなかったため、「結局、農地から上がった物、貸してら田畑から米返ってくるし、そういう生活よ。この児童センターの影、一千坪、畑あったんだ、借金でみんなパーよ、売ってまった。」というように生活は苦しかった。ただ、千年村で小栗山が一番貧しいところであり、それほど大きくはなかったが、B氏の家には土地があり、「地主」ではあった。高等小学校を卒業後は、農業を継ぐことを望んではおらず、鉄工所へ出稼ぎに行くつもりだった。しかし結局は跡を継ぎ、「オラだけだば、農業稼いで儲けにゃまいと気持ちではいたけども」と、農業一筋で働いている。親代わりになって9人兄弟を育ててきたという。

農作業のために畑で使う目的で、昭和31年（1956年）に免許をとって三輪車を購入した。それが縁で養豚業の肉屋にも働きに行くようになった。はじめ、「養豚はやるとは考えねでったな。臭いものはまね。なんたってサラリーマンの子だっきゃ」と抵抗はあったが、「豚、臭いけれども、可愛さ生まれてきたわけよ」ということで、昭和35年（1960年）ごろからは自分でも養豚業を始めた。養豚は南部より津軽の方がさかんで、とくに彼の小栗山が一番であったという。「それで子供高校さ入れる全部、親からはお金何も貰わねよ、貧乏でいたとごで。全部、豚でわらさんど高校さ入れただよ。」多くの友人が出稼ぎに行ったが、B氏ら小栗山と近接する松木平に住む2、30人の養豚業のグループは、村に残って養豚を行った。B氏は昭和54年（1979年）に、いち早く、250万円で車のクラウンも買っている。

その後、50年代に入ってからには<千年>の養豚部長から、一番養豚が盛んだった弘前市農協の専門委員にもなった。B氏は農業関係の賞も受賞し、初めて「認められた」と感じたという。しかし、その後養豚は市場価格の暴落によって衰退する。B氏は借金のために、多くの畑を売ったのだという。

現在の妻とは昭和33年（1958年）に結婚した。妻は、昭和11年（1936年）に弘前市の小沢（近郊農村）で生まれた。妻の生家ははじめ酒やタバコを売る店であったが、農業が儲かる時代であったので、大工をやっていた父親は農地を買って農業に変わったという。

B氏の兄弟は、B氏を含めて5男4女の構成である。長女は昭和2年（1927年）生まれで、弘前市内の高校に行ったが「父親も母親も仕事さねえとごで、学校さ行ってられねえわけよ」ということで1年間でやめ、すぐに市内・石川（近郊農村）の農家に嫁ぐ。次男はB氏と同じ中学校を卒業

して、現在は市内の富田（明治発展地域）に在住している。次女は同じ中学校を卒業し、長女と同じく石川に嫁ぐも、病死した。三男は中学校卒業。四男は中学校を卒業後、事務職で働く。現在東京に在住している。三女は幼少期に死亡した。四女は東京へ出稼ぎに行き、現在も東京に在住している。五男は中学校を出て東京に就職、大工の仕事をしている。東京在住である。兄弟のほとんどが「中学校終わって就職。出稼ぎで行ってるのも全部、東京の方さ就職して」という状態であったが、「就職したとごで、中学校は高校と同じレベルで就職したべ、それだば安いでばな、出稼ぎはあの辺り1万5千円だの2万円もらうだで1日に。...でこういう就職はやめたって家さ戻ってきて、1週間で戻ってきて、それで出稼ぎさ行ったのよ」という兄弟もいた。

4) 子世代

B氏は3人の男の子どもをもうけた。長男は昭和34年（1959年）に生まれ、弘前市内の高校を卒業した。5ヶ月間大工の仕事についたが、事故にあい、その後B氏夫妻と同居している。次男は「養豚やらせると思って、山1町歩ならして」五所川原市の農業高校に入れるも、学業半ばで死去。三男は弘前市内の私立高校を卒業した。現在は妻と2人の子どもと共に、近くに家を建てて住んでいる。弘前市に隣接する平賀町にあるりんご屋に勤めている。

つまり、本人は親の仕事（農業）を引き継ぎつつ、新しく畜産も手がけていた。しかし、弟妹のうちで、より年長の弟妹は、近隣に嫁いだり、就職して居住している一方、年若い弟妹は、すべて東京に就職・居住しているのが特徴的である。子どもは、同居・近居しているが、家業を継承していないことが分かる。

(3) 「明治発展地域」・<富野町> G家 (図3 - 13)

1) <富野町>の概要

「明治発展地域」は、鉄道・駅の開発、第八師団の設置により、明治末期から大正期にかけて開発が進められ、急速に発展した地域である。そのなかでも<富野町>は、藩政期には城下町の最縁部に形成された町であったが、第八師団の関係により、新しく形成された<富田3丁目>などとともに急速に開発された。つまり、軍諸施設と隣接していた<富野町>は、その地理的条件のために軍人の居住地として開発が進められた。将校官舎や兵舎が建てられたほか、家族をもった軍人を対象とした貸家や、独身者を対象とした下宿などが立ち並ぶようになっていく。明治31年（1898年）には<富野町>に弘前陸軍衛戍病院が発足する。ここには全国各地から傷病兵が収容され、見舞い客などもたくさん訪れた。これは、のちの国立弘前病院となる。さらに大正10年（1921年）には、旧制官立弘前高校が旧富田村に設置された。これによって、軍隊がやってきた時と同様に、全国から生徒が集まってきた。町には学生向けに商店や下宿屋を興す人々も現われ、<富野町>には教授官舎も建てられた。こうして町には軍人だけでなく学生も溢れることとなり、ますます賑やかになっていった。のち、官立弘前高校は弘前大学となっていく。

一部の場所には大きな長屋などもあったが、多くは一軒家が並んでいたこの地区では、平成5年（1993年）ごろから学生向けのアパートがとくに急増した。それまで住んでいた人は、「みんな、よ

そ行って、どこさ行ってるか、さっぱりわかんないけど。ほら、だいたいほら、だんだん人少なくなつて、一人暮らしの年寄りがいたのなんかが大抵多かつた。そういうのがみな子供の所に行くか、また亡くなるかなんかして」という状況にある。子どものいる県外への移動などが多いという。人口の減少は著しく、子どもの数も激減している。「うん、昔あの、道路でみんなあの、遊んでいたもんだけども、今ほとんど、孫とか車多いから道路で遊ばねえ。あのラジ体操とかなんか、夏休みなんかにやっても何人も、5、6人ぐれいかな？うーん、それから国立病院の、あの職員の子供、国立病院はほら、割と若い人がいるから。それらの子供達もまず、全部集めても20人もないんでないですか。」

現在の〈富野町〉の世帯は、アパートの学生などを除いて、225世帯である。

2) 親世代

G氏の父は岩手県生まれである。家は岩手の中央部あたり、花巻から釜石に行く途中に位置する宮守村にあった。代々の農家であり、比較的多くの田畑があった。しかし住まいは山の方だったので、田畑では米や、雑穀、豆や麦や粟を作っていたという。

3) 本人世代

G氏は、6人兄弟の四男として生まれた。「兄の長男が私と同じ年だったんですよ。兄の子供と私が」というように、1番上の兄とかなり年の差があった。上に姉が1人、下に3つ離れた妹が1人いる。

G氏は高等小学校を出た後、しばらくは農業の手伝いに従事したが、「もう19にもなったから1人で何かして、あのうー、ご飯を食べていこう」ということで、昭和12年(1937年)、19歳のころに、弘前市の31連隊に志願して入隊する。5連隊は青森県の間人が入ったが、31連隊は岩手県の人たちだけが入っていくものだった。最初は、仙台の下士官を養成する学校に1年入り、戦中は満州に行くなどした。終戦後、1年ほど「ブラブラ」していたが、軍隊時代の部下が役場のすぐ前の駐在所の巡查であり、彼のついで、清水村の役場に入る。昭和22年(1947年)、30歳のころであった。清水村が合併して弘前市になると市役所に勤め、定年まで修める。その後、県から頼まれて新しくできた老人ホームに勤務するようになり、80歳までそこで働いた。なお、学校は終戦後、通信制で弘前高校に入り、卒業をしている。

妻は6つ年下で、父親は警官の仕事をしていた。妻は高校を出て、市内の郵便局で働いていたが、「今はやめなくてもいいんですけども、当時の女の人、結婚したら全部女の人やめなくてはならなかったんです」ということで、昭和16年(1941年)に結婚したあと、仕事をやめる。妻は17、18年前に亡くなった。

G氏は彼女と結婚すると同時に養子となり、それ以来、〈富野町〉に住んでいる。そのいきさつは、「上官の人がわざわざ、そこの家に行けと。『養子に行け』と、こういうわけ。いつ戦争行くようになるか分からないから、残された人は困るからと。それが上官の命令によって仕方ないから。下宿屋の、どうせ、下宿屋に行く(ような)つもりで」ということであった。

4) 子世代

子どもは2人おり、長男は昭和21年（1946年）生まれである。長男は弘前高校を出て、市内の栄養専門学校に行き、栄養士の資格をとった。ちょうどそのころ学校給食が始まる時で、隣町の教育委員会に就職し、給食センターに勤める。そして県の職員になって、大鱒町に転勤し、また弘前に戻ってきた。長男の妻は岩木町生まれで、2つほど年下である。医療事務の仕事をしているが、定年間近である。

この長男夫婦には子どもが1人いる。彼は、弘前高校を経て京都の大学を卒業した。いったん就職したが、現在は再び大阪の大学の夜間部で学んでいる。27歳である。「まず、来るとは、帰って来るとはわかんない、来たって何もないんだもん」と、孫が帰ってくることに否定的である。

G家のファミリーコースで注目すべき点として、本人は他県の農家出身であるが、軍隊での仕事に就き、弘前へと流入していた。よって、本人は継承する家業を持たず勤め人であり、子どもも当然、勤め人となっていた点がある。

(4) 「新興住宅地域」・〈青山〉H家 (図3 - 14)

1) 〈青山〉の概要

先述したように、〈青山〉はここで取り上げた〈桜ヶ丘〉や〈城西〉などと比較すると、後発の「新興住宅地域」であり、昭和51年（1976年）に宅地造成基盤整備が開始された。

H氏は、ここに昭和63年（1988年）に居を構えた。H氏が住みはじめた頃から、〈青山〉は生活するのに不便の少ない場所であった。まず交通面では、自動車の普及が当たり前のものとして、幅の広い道路が整備されていた。また生活必需品を多く備える大型店や、日常生活に必要な病院や郵便局、銀行といった施設も充実していた。それとともに、外食産業や娯楽施設等の参入も視野に入れた開発が行われていた。これらの開発は、先行した〈桜ヶ丘〉や〈城西〉の開発の反省点を活かし、生活スタイルの変化に対応した開発であった。この結果、希望者が殺到し地価が高騰して、居住者は高所得者層の人々が多くなったという。実際、「弘前で最も住みやすい地域」といわれる〈青山〉には、社長や開業医が多く住居を構えている。

町会は北地区9町会でよくまとまっているといい、運動会やソフトボール大会などの行事も多い。現在、〈青山〉町会の世帯数は約200世帯であり、子どもは小・中学生が少なく、逆に高校生や乳幼児が多いのだという。一人ぐらしの高齢者世帯は1軒しかないが、三世代同居の家族も少ないのが現状である。

2) 親世代

父親は電電公社に勤務しており、転勤を繰り返していた。

3) 本人世代

H氏は、昭和1年（1926年）、五所川原市に生まれた。5歳のときに、父の勤務地が変わって、木造町に引越しする。旧制木造中学校を卒業して、弘前市内の旧制の師範学校に入り、昭和28年

(1953年)に卒業する。そして母校の中学校に勤務して5年ほどいたが、のちほど弘前市に勤務地が移り、途中、木造の中学校に教頭として3年間勤めた以外は、市内の中学校や教育委員会を転勤しながら定年まで勤める。

H氏は土地の売り買いで多くの利益を得てきた。「私の教え子が不動産屋だわけだ。それで私若い頃から土地がまず投資の第一だと、そう思っていたから。土地をだいぶ買ったんだよ。」H氏は弘前市内の家を購入しては転売し、転居を繰り返している。まずは市内の品川町に購入し、次に田茂木町に「小さい家」を買い、そして中野に家を建てる。最後に、昭和63年(1988年)、62歳のときに、現住地の<青山>に家を購入し、現在にいたっている。このとき青山に移った動機としては、病院の存在などの他に、前の家が「区画が入り組んで、道路が4mくらいでね。何あっても消防車も入れないし、区画がちゃんとしてなかったでしょ。だからここはもう区画がちゃんと新しくできたでしょ。雪の問題があったりするでしょ」と、交通の利便性と排雪の問題があげられていた。

<青山>に入居した当時、「私の頃は(行事が)全盛期であってね。で、我々いた頃は弘前一の町会にしよう。住みやすい第一の。実際調査しても住みやすい町で<青山>が一位だった。それは燃えていた」と新興住宅のまちづくりに大いに力を入れていたのだという。

妻は夫より1年遅く、青森で生まれた。長らく秋田で育ち、旧制の高等女学校を卒業している。昭和53年(1978年)ごろまで秋田の工業会社の経理として勤めていた。

現在は、妻と94歳になる母と3人で同居している。

4) 子世代

子どもは男女2人をもうけた。その息子と娘にもH氏が同じ町内に家を購入してやり、近居している。「我々、まあ一緒に子どもたちと住まないというのは、お互いにプライバシーがあるし。ただし、ほら、今度、冬なんか、雪とか問題あれば困るから。200メートルくらい、スプの冷めない距離さ。」孫も頻繁に行き来をしているという。

以上から、H氏の場合は、居住地の移動がめまぐるしく、定住するまでに時間がかかっていることが分かる。またここでは、子どもが同じ「新興住宅地域」に近居している点が注目される。

(5) 都市内のファミリーコースの特徴

ここまで都市内の4つの地区の4家族のファミリーコースの事例を見てきた。その中からいくつか留意点をあげておきたい。

第2節で検討した周辺地域(非都市部)の家族と同様に、弘前市内の4家族でも、地域社会が変貌を遂げていく中で、世代交替をへて居住地が分散し、また家・家業の継承が見られなくなっている点は共通している。

例えば<千年>は元来、純農村地帯であったが、近年、急激にりんご畑や田んぼをつぶして団地やアパート・マンションなどが建設され、新しい流入者が増加した。そこにあるB氏の実家はもともと大きな農家であった。父親は高校を出たのちサラリーマンを経験し、実家へ戻る。父親に代わってB氏が農業一筋でやってきたが、現在はすでにかんりの土地を手放している。そしてその子ども

は勤め人となっていて農業を継ぐ様子は見られない。また、<駒越町>は郡部と旧市街地の境目に位置し、比較的新しい商人・職人の町として栄えてきたが、現在の商店数は減少の一途にある。A氏の実家はそこで酒屋の自営業を営んできた。父親が酒屋を継ぐも早くに亡くなり、A氏自身が大学をあきらめてそれを受け継いだ。しかし、子どもは市内に嫁いで会社勤めであったり、少し離れた都市に居住して勤め人となっている。

一方で、周辺地域（非都市部）と比べて特徴的な点もあった。第一に、都市部である弘前市内の場合、近郊農村部も含めて、住民の学歴が比較的高く、また職種も都市的職業につく傾向がある。例えば、B氏やその兄弟は農村地区ということもあるのだろうか、中学校卒業が多いが、父親は商業高校を卒業後、県庁で働くなどしている。またA氏は断念したとはいえ、大学にも合格している。妻も高卒である。子どもは長女が短大を卒業して会社勤め、長男も工業高校を卒業後に専門学校へ行き、酒の卸の仕事に一時ついている。G氏の場合は、軍隊を経て長らく役場・市役所に勤め、妻は郵便局に勤務し、その息子は県の職員として働くなど、みな雇用されて働いている。H氏は大学を出て教員一筋である。

第二に、家族の分散居住の点でファミリーコースが類似しているとはいえ、都市家族の拡がりには比較的狭い範囲にとどまっており、周辺地域（非都市部）に見られたような関東との強いつながりは薄かった。例えば、B氏の兄弟では、長女と次女が<千年>内の農家に嫁いでおり、また子どもは平賀町で暮らしている。A氏の姉は弘前市内に嫁ぎ、次女は三戸に嫁いだ。A氏の長女は弘前で会社勤めをしている。さらにH氏の場合は、2人の子どもが同じ新興住宅のなかで近居している。




都市居住者のファミリーコースは、周辺地域（非都市部）のそれと比べて、次のような特徴を持つものとしてまとめることができよう。都市部ではもともと、より高等の学校への就学や、都市的職業への就業の機会が高く、より自由な職業選択が可能となっているとはいえ、それでも、ここで見た本人の世代（大正から昭和初期生まれ）までは、親世代からの家業継承のパターンがしっかりと存在していた。しかし、そのきょうだいや子世代になると、家業と関係なく就業するパターンが現れ始め、他出も増えていく。ただし、第2節で見たような周辺地域（非都市部）とは異なり、きょうだいや子どもの近居・同居が多く、またそのきょうだいや子どもも、仕事は家業と断絶しているかもしれないが、就業場所はきちんと近くに確保されている。こうした家族展開を典型的に示しているのが、「新興住宅地域」であろう。ここでははじめから継承すべき家業はなく、またそこで新たに仕事を起こすこともなく、居住地としてのみ存在している。そして余裕ある居住空間を活用して、子どもとの同居・近居も頻繁に見られ、そしてこうした状況は、もっとも家の世代継承が厳格であったはずの近郊農村部——ただし、もっとも新興住宅地に接近し、その影響を受けやすく、かつ土地にも余裕がある——にも同様の現象として現れつつあるのである。

3 - 3 - 4 小括

以上、都市の変遷と個人のライフコースについて、居住地の変遷、ライフイベントと都市利用、ファミリーコースの3つの観点から分析を行ってきた。それらは以下のようにまとめることができるだろう。

表3-4 各地域の生業内容の変遷（弘前市）

	旧城下町		明治発展地域		近郊農村地域		新興住宅地域	
	地域内	地域外	地域内	地域外	地域内	地域外	地域内	地域外
親世代	下宿屋 藤田造業 鑄屋 鑄屋 鑄屋 酒印 洋服局 医業 酒系 毛屋 呉屋 時屋 酒屋 印刷屋 店 洋服店 店 旅子店	鍛冶屋 桶工 大掛 木鏡 木旗 豆腐 農具 研究 出稼ぎ 漁業	農業 軍隊 食堂 旅館 連業 リんご カフエ 軍服屋 舟当 馬具 下宿 遊郭 タイヤ屋 軍隊 下宿屋 問屋 りんご屋 物販 食堂 タイヤ屋	(農業) (警察) (タクシー)	農業 駄買付け 出稼ぎ 漁業	県庁職員 鉄道 バス 酒屋 出稼ぎ 漁業	(農業)	(電電公社) (医者)
本人世代	下宿屋 八百屋 社長 医者 通勤(市区他地域へ) 教員	県庁職員 建材店 出稼ぎ 漁業	郵便局 公務員 通勤 老人ホーム 市役所職員	郵便局 公務員	事務職 自衛隊 バス 出稼ぎ 建設業	米・酒・灯油屋 温泉	元の職業 教員 社長・経営者 医者 養和師 教育委員会 秋田工業 市役所 警察 自衛隊 看護婦	
子世代	居酒屋 下宿 大塚 市役所職員	スミミング・クラブ 酒類卸業 コンビニ 工員 幼稚園 通勤(市区他地域へ) 教員	病院 アパレル経営 ホテル パーム屋 ダイエー ヨーカドー 通勤(市内他地区へ) 給食センター 医療事務 教育委員会	タイヤ屋 アパレル経営 ホテル パーム屋 ダイエー ヨーカドー 通勤(市内他地区へ)	アパレル経営 通勤(平賀町へ) りんご屋	通勤(市内他地区へ) 不動産屋 医者 教員 音楽教室 中華料理店 床屋 スパ ピアノ		

 地域独特の生業
 地域内で新しく生成した生業
 地域外の生業

まず明治期、現在の弘前市域には城下町と農村が存在していた。その後、明治末期に軍隊や鉄道が設置されると、人々が内外から参入し、さまざまな仕事を創出して、弘前市の経済活動は活発化する（親世代）。戦後になると、人々はそれらの仕事を受け継ぎ、また創出しつつ、経済活動はさらに大きく興隆した（本人世代前半）。そして、昭和40年代頃より、都市の大幅な拡大（郊外化）がはじまる。新興の住宅地・大型店・物流拠点の形成が進む。その中で当初は、「旧城下町」・「明治発展地域」が最盛期を迎えるが、徐々に郊外部に人々の流れが移り、昭和50年代後半には衰退が始まる。このとき新しい仕事は個々人の手ではほとんど生成されなくなるのである（本人世代後半）。平成以降になると、中心市街地の活性化事業などが行われるものの、中心部からの人口流出は進み、反対に郊外部への人々の定着はいつそう進む。他方で、この時期には農村部においても郊外都市化が進んでいる。就業形態もほとんど被雇用になっていく（子世代）。

このような変化について、第2節と同様に、各地域の生業内容の変遷を、聞きとりの中であらわれた職種をピックアップすることから整理したのが表3 - 4である。この職種の変化からも明瞭に今述べた変化の傾向を見て取ることができよう。

4. 考察

4-1 要約

以上、本稿では、大きく二つの調査から、津軽地域を題材に、そこで暮らす人々のファミリーコースと、中心都市・弘前市の空間的拡大との関連を検討してきた。まずは、ここからえられた、弘前市およびその周辺地域の現代史について、その結果を要約し、その上でそこから展開しうる考察を試みる。結果は、時期を4つに区分し、時代順にまとめる形で示しておく。

(1) 現代日本の地域社会の構成は、大きくは、近世にその基礎が築かれたと言われている。津軽地域では、その連続性は顕著であり、明治以降、大きな社会変動を経験しながらも、都市と町、村の基本的な形・関係はひきつがれていた。そしてそこで暮らす人々の社会関係の基本には、家と家業があったのであり、新たに村・町が形成される場合も、それは人々が新しい機能を開発し、家業を立てることを通してであった。逆に言えば、そうして創発された機能 = 家業をその子どもたちが継承することで、村・町はながらく維持されてきたと言える。

(2) 明治末の経済発展・国家の拡張のなかで、弘前では鉄道・軍隊に付随して、新たな町が形成されていく。さらに戦後は、山間部や河口部の原野での開拓もさかんに行われ、新しい村も生成されていった。

昭和30年代には、関東圏との接続が一挙に進み、農村部では都市出稼ぎ、および子弟の集団就職が行われた。他方で、こうした周辺農村地域と中心・弘前との関係はまだ限定的なものであり、地方都市は就労の場として十分に成熟していない。他方で、学校・消費地としての利用頻度は交通網の整備によって増大する。

(3) 昭和40年代以降には、弘前市街地が本格的に拡大することとなる。この時期には、農村部では第一次産業の産業化（土地改良、機械化、商品作物の展開等）も進行し、また出稼ぎ就労・兼業就労が安定化していくことで、農村部でも豊かな生活が実現していった。そしてそうした消費生活の生成を背景に、弘前市の中心商店街が大きく拡大する。

(4) しかし、昭和60年代から平成期になると、郊外型住宅地の開発がさらに進行し、住宅団地や大型店、物流拠点などが、都市の郊外地域のまわりにあふれ出ることになる。近郊農村では、その農地がそれらの開発に利用され、農村自身も住宅地化されていった。他方、周辺の農村地域では若年層の流出がさらに進み、都市からより遠い周縁部（山村・半島部）では過疎化・高齢化が問題化する。これに対し、弘前に比較的近い農村地域では、モータリゼーションと、拡張した都市域（消費の場・就労の場）を利用して、浮島のような形で、弘前近郊農村と同じように農村の住宅団地化が進行していく。

4-2 考察

最後に、以上の現代史をいくつかの観点から解釈し直し、本稿の結論につなげたい。まずは、ここで行ってきた分析視角としての「ファミリーコース」について、その意義を確認しておこう。

(1) ファミリーコースという視点

現代日本の都市・地域社会は、とくに戦後、大きな変貌を遂げてきた。そして、その社会変動をとらえるために、マクロ・ミクロの視点をどのようにつなぐのかということが、長らく課題とされてきた。本研究は、ファミリーコースという視点から都市空間を見つめ直すことで、マクロな都市構造とミクロな個人の生活行動とを連結させて、地方都市およびその周辺部の都市化過程の説明を試みたものである。地域に生きる人々が、その地域や都市、そして遠く離れた大都市圏をどのように活用してきたのか。そしてそれが、当該都市の変動とどのように関連してきたのかを、家族の変化に注目することで検討した。

家族社会学には「家族周期論」があり、また個人の視点からは「ライフコース論」が用意されている。ここであえて「ファミリーコース」という視角を導入した理由は、次の点にある。

本研究はあくまで、都市社会学ないしは地域社会学の研究として構想されたものである。ここでは、日本社会における、大正期から昭和・平成にかけての、約1世紀の地域社会変動を記述しようとした。

その地域社会変動を記述する際に注目したのが、地域に展開する家族のライフコース（これをファミリーコースと呼んだ）である。ここで見えてきたものはもちろん、家族社会学の用語法で言えば、いわゆる伝統的な「家」から近代的な「家族」への転換という、ごく当たり前の現象としてとらえられるものだろう。しかしながら本稿では、この家族変容を就学・就業・居住の〈場所〉と関連づけていくことで、地域社会学的研究に家族論を結びつけ、地域社会変容を家族の面から説明することを試みたのである。

最終的にここで確認した家族変容は、家族のサイクルが地域の中で持続的安定的に「循環」していた状態から、約半世紀の間に急激に各方面へと「分散」ないし「拡散」していくといった形のものであった。その過程は、もちろん「サイクル」として記述できるものではなく、「コース」であり、またその記述対象はあくまで「家」であって、個人のライフコースを単に積分したのものでもない。地域研究に、家族の視点を導入したいということから、家族周期論で示される家族像と、ライフコース論で示される家族像の中間の状態——さらに言えば、この二つの家族像の間の推移——に目を向けることとなり、そこでとくに「ファミリーコース」という水準を分析の目線として採用したのであった。

以上のように、ここで言う「ファミリーコース」は、本研究が対象とした、この時代の日本の地域社会変容を記述するための方法論である。その意味で、普遍化や応用可能性がある概念というよりは、20世紀の地方都市史を家族の視点から繙くための、とりあえず本稿のみに使用可能な概念だと考えていただきたい。それゆえ、こうした形で表現する「家族」の変容を、家族社会学の議論にどのように再設置しうるのかは、今後の検討課題である（家族周期論については、森岡清美（1973）を、ライフコース論については、森岡清美・青井和夫編（1991）などを参照）。

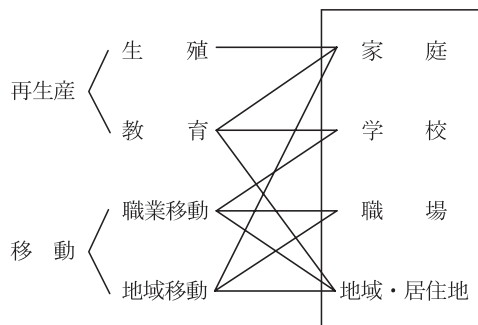
（2）再生産と移動

さて、このファミリーコースを分析していく際に、地域との関連で最も重視した視角が、＜再生産＞と＜移動＞であった。そしてこの点を強調することがさらに、ここでいうファミリーコースの内実を説明することにもなるので、以下やや詳しく述べておきたい（図4-1も参照）。

ここでは、ファミリーコースという観点から、家族と都市空間の関連性を検討し、地域の社会変動を記述しようと試みたわけだが、その関連（個人 家族 空間 社会変動）を検証するのに最も重視した視角が、＜再生産＞と＜移動＞であった。

＜再生産＞には、生殖とともに教育がある。生殖は家族の基本だが、教育には家族のほか、現在では学校が重要な位置を占める。というよりも、家族（や地域）で行ってきた再生産過程に、学校（高等教育）が深く関わっていくことで、従来の「家」「むら」「まち」の再生産過程（別様に言えば「サイクル」）が根底から突き崩されていく様をここでは描いていくこととなった。

図4-1 分析視角（再生産と移動）



さらにこの伝統的な再生産過程が変質していく様を、空間論的に把握するべく用いたのが「移動」の視点である。移動には職業移動と地域移動があるが、それぞれ、具体的には家族員の職場と居住地が対応する。そしてこうした<再生産><移動>をファミリーが、どの時点でどのようにどの空間を使用していったのかを個々の事例から汲み取って分析し、さらにその分析から、地域社会の変容過程を記述しようと考えたのである。

(3) ファミリーコースと都市空間の変容・再編

最終的に、このファミリーコースから見てきた地域社会の変遷を、都市空間の変容・再編との関わりの中で、より一般的に記述するならば、以下になるだろう。先ほどの要約(4-1)は、第2節と第3節の調査結果を単に組み合わせただけのものであった。今度は、弘前市を中心とする地域社会に展開している家族のライフコースの変遷(ファミリーコース)と、都市空間の変容との関わりに留意しながら地域の現代史を記述しよう。そしてそこから、現代日本社会の地方都市およびその周辺地域で生じている変容過程がいかなるものなのか、その意味付けを深めていきたいと思う。

近世社会からの移行としての明治・大正期の近代社会は、身分制度の解体という大きな社会的変容を伴いながらも、それでもここで見る限り、それぞれの家族(むしろ「家」)の再生産を通じて家業は再生産され、また「むら」や「まち」といった地域社会も着実に再生産されていた。人々は、家に所属し、家を通じて、「むら」や「まち」に関わりながら、その地域が提供する生きる術を獲得していた。その後、新たに成立した地域も、こうした生きる術を、家と地域とを通じて獲得することで、新たに「むら」となり「まち」となったのであり、かつまたそれが世代を超えて再生産されることを通じて、「むら」や「まち」が実在化していったのであった。そうした再生産過程は、少なくとも戦後直後ぐらいまでは確認でき、またごく一部だが、戦後の開拓村では低成長期以降(昭和50年代)においてもそうした様子を垣間見ることができた。そしてこの限りで、たしかにファミリーコースは円環(サイクル)をなしていたのであり、そうした家族の再生産をつうじて、地域コミュニティも再生産され、緩やかに形を変えながらも安定的に持続していたのであった。

しかしながら、戦後、家族員の生きる術は、家や地域が提供するものでは必ずしもなくなっていく。それはむしろ、市場や国家が提供するものにかわり、かつ、地域的制約を超えて、全国的規模の移動の中で獲得されるようになった。こうした移動に深く関わったのが、戦後の中学校義務教育である。加えて、幕末以降から引き続く人口増加は、地域内の雇用では回収できないいわゆる過剰人口を発生させ、とくに戦後は否応なく、人口排出を余儀なくされていく。こうした状況はとくに、農村部で顕著であった。他方で、引き続く経済成長が、これもまたとくに戦後、就業人口を中央部で積極的に吸収していくことを可能にし、地方から中央へのいわゆる「民族大移動」が開始されることになる。その際、ここで対象とした東北日本では、移動先が北関東や関西、そして北海道と、距離的に大きく離れていたために、より極端な形で家族の分散を生み、かつ他方で、地元にとどまりながら遠隔地を就業の場として利用する「出稼ぎ」も常態化したのであった。

それでも、産業社会の成熟=脱工業化は、地方都市にも第三次産業部門の拡大を生み、昭和末期から平成期にかけての家族分散は、ごく近くの都市空間を利用できるようにもなっていく。ただし

その際の、「まち」「むら」からの家族の溢れ出しは、旧来の都市内部ではなく、その外延部に、「郊外」の形で定着することとなった。ここで見た「新興住宅地」の形成がそれにあたる。

都市空間の変容という文脈の中で重要なことは、この郊外に広がる住宅地が、居住地にのみ特化した空間として確立（ここでの文脈をより強調して言うなら「販売」ないしは「貸借」）されており、生業との重なりが全くないために、そこで成立したファミリーが、従来の「家」とは異なるものとなった点である。この空間には、地域にある特有の資源や条件を利用した仕事があるわけではない。この地域に生活する人々は、必ずしもこの地域の「地域性」によって生きてはいない。基本的に、別の地域に住むことも自由であり、また極端に言えば、どの地域であってもそれほど大きな「意味」の違いはない。だからここでは、地域に再生産すべきものは本質的になく（ここで本質的にというのは、それがなくては生活が成り立たないという意味である）、だからこそ、ファミリーも、それ以前と同じ形で再生産する必要が、ほとんど「ない」。

こうした地域と家族の関係は、郊外を典型として、中心市街地の「まち」にも、またこうした郊外のもととなる農地や山林を所有していた都市近郊の「むら」にも、徐々に普及する。そして最終的には、都市から遠く離れた町村部の「まち」や「むら」にも同様の生活形態が波及し、地域社会全体の構成が大きく転換していくことになる。

こうして、地域の変容（共同体としての「むら」や「まち」の解体）は、家族の変容（伝統的「家」の解体）と相互に関連し合いながら、急速に展開していった。家の構成員は、家族の単なる一員になり、個人になる。そしてこの時には、都市空間は内部を空洞化させながら、その外延へと溢れ出し、農地を都市空間に変えて、農村部までも都市化していき、「全地域にわたる都市化」が成立するのである。

（４）社会変動と世代転換

以上のような形で、家族変容と都市の空間変容とを関連づけながら分析し、地方都市を中心とした地域社会の変容過程の説明を試みたわけだが、この、きわめて短期間に生じた急激な社会変動が、いったいどのように可能になったのかを読み解く手がかりは、やはり家族に接近したからこそ見えてきた「世代の転換」にあるように思う。ここで、世代の転換と、社会変動との関係について考えてみたい。

20世紀日本社会の変容については、経済・産業論的説明、ないしは政策・政治論的説明のほか、脱工業社会後の情報・メディアの展開による文化論的説明など、様々な読み方が存在してきた。これに対し、ここでは、家族と地域の観点から、この社会変動を読み解くことを試みた。

その際、家族と地域社会の変容を読み解く手がかりとして「再生産」に注目したが、ここで、ある世代からある世代への再生産は、必ずしも全く同じものを作り出すものではないという点に注意したい。もちろん、再生産の基本には、同じような機構をもったものを作り出すということがある。しかしながらまた、「再生産」の間には、必ず差異が生じるというのも正しい。遺伝子で制御される生命の再生産過程でも、次世代に生じる微妙な差異こそが、生命の持続性にとっての本質である。再生産過程で生じた新しい差異の創発こそが、環境への自発的適応を可能にするのである。

ところでこの再生産過程に内在的な差異はもちろん、世代間でそれほど大きな差であるわけではない。でなければ再生産ではない。しかしまた、たとえ小さな差異であっても、数代にわたる世代転換の中で、その差異が急速に拡大していくことも考えられる。この世代転換による差異の急速拡大過程についてややモデル的に考えておこう。

ある世代が、何らかの形で大きな環境変動を経験した場合（それが内在的なものであれ、外在的なものであれ）、その世代は何らかの形でその新しい環境に順応し、適応を編み出す。この時そこには、新しい適応戦略を含めた、新しい環境が成立しているが、続く世代は、この新しい環境を前提として成長することとなる。すなわち、前の世代が創り出した新しい環境は、次世代にとっては再生産の所与の条件となる。この世代はその新しい環境のなかで再生産されることで、前世代よりもより効率よくその環境を我がものとしながら、さらに新たな環境を創り出して次の世代の生成条件とする。こうした新しい環境 その環境における新たな世代の生成 さらに新しい環境の創造 さらに新しい世代の生成・・・という、新環境＝新世代の創発循環は、数次にすぎない世代交代であっても、結果として大きな社会変動を生み出すことにもなる。

世代の更新・転換は、一方で安定的な社会の継続をもたらすこともあるが、他方で社会変動を引き起こす大きな機構にもなる。ここでは、昭和～平成史に関わる三つの世代に注目し、その転換過程を明らかにすることで、この時期に生じた日本社会の社会変動を、家族の中での世代転換という、ミクロ的な視角から説明することを試みた。

(5) 日本の地域社会の変容

最後に、この世代転換の観点から、さらに地域社会の変容を説明し直し、簡単な結論を述べて本論を閉じたい。

日本の地域社会変容を考える場合、それを世代から見たとき、その世代転換点として、大正～昭和初期生まれの世代(ここで言う本人世代)がきわめて重要である。この世代を軸として、その前後の世代転換を経て、日本の社会は大きく変容してきた。大正～昭和初期生まれの世代は、前世代(明治生まれ世代)から、家のみならず、生活する場所や仕事を継承した。彼らは、戦中・戦後の大きな社会の変化の中で、それを拡大したり、作り変えたりしながら、次の世代を生み育てた。この世代の中には、そうした継承の過程から外れた人々も大勢いたが、彼らもまた、日本の経済成長のなかで新たに生成した仕事や居住地を獲得・選択していく。こうした人々の活動の結果、日本の地域社会は充溢し、その活力は外へも溢れ出していったのである。

こうした世代の後に生まれてきた新しい世代＝戦後生まれ世代は、新たな環境のなかで成長することになる。かつここには、敗戦という、体制・価値・文化・社会の大きな断絶点も用意されていた。そしてそこでは、その新しい環境を条件として、これまでとは別のライフコースが成立していく。この世代は高等教育を受け、かつ高度に発達化した交通・通信網を背景に、自由に仕事を選択することが可能になっている。思想としても、自由や民主主義、そして科学的合理主義を基礎として、伝統的思考法を駆逐し始める。居住地選択も大きく広がった。そしてこの結果、こうした戦後生まれの世代が担う仕事は、もはや先代の仕事を継承するものではなく、また新たにその場所

で仕事を作りだすこともほとんどなくなっていく。居住地は純粋な居住地となる。他方で、例えば「むら」に残してきた親たち（これが大正から昭和初期生まれになるが）は、農林業の産業化によって、高齢者でも十分に可能な作業状況が創り出されており、また国・市場が提供する福祉、保健、医療、その他生活全般にわたるサービスがこれを支えている。そして、継承すべき家産であった家や農地がこの代限りのものとして放置され、「むら」としての固有の意味も失われていくのである。

結論として、このような社会変容から読み取れる二つの相矛盾する過程を提示し、その関係を展望しておきたい。

まず第一には、ここにはたしかに、伝統的な家や共同体から個人が解放されていく過程が読み取れる。

しかし他方で第二に、ここには空間の意味の変容・画一化が進行する過程がある。都市空間は、もともとモザイク型の空間構成であったが、その場所は、居住地であり、職場であり、多様な意味を含んでいた。それが世代の転換を経て、「新興住宅地域」に典型的な、住むことに特化した画一的な場所があらわれる。こうした空間の画一化はまた、中心市街地や農村部にまでも広がっていく。他方で（本稿では十分に論証できなかったが）ビジネス空間と大型店舗を中心とした商業空間、そしてこれらと居住地をつなぐ物流拠点といった、別の空間が都市のモザイクとして浮かび上がってくるが、ここでついに空間上でも経済の最優位化が達成されるのであり、そしてこのなかで個人ははじめて生きることが可能になっているのである。

人々が生きる共同体の規模は巨大化する。生きるために依るべき身近な手がかりが失われつつ、一見自由な個人が成立する。第一点目として示した、個人の解放・自由の可能性はその反面であるにすぎない。

[参考文献]

- 青森県,2000,『青森県市町村合併研究会報告書』.
- 青森県,1994,『消費購買動向による商圈調査報告書』.
- 青山栄,1985,『板柳町史』津軽書房.
- 浅瀬石落城四百年記念事業協賛会編,1997,『浅瀬石沿革史 常住不滅』.
- 千年村,1953,『千年村昔ばなし』.
- 千年村,1949,『千年村村勢要覧』.
- 町会結成十周年記念誌編,1997,『青山町会十周年記念誌』青山町会.
- 五周年記念誌編集委員会,1974,『城西町会連合会五周年記念誌』城西町会連合会.
- 弘前大学農学部地域農業研究会,1980,『千年地区の農業振興と農協の役割』弘前市農業協同組合.
- 弘前大学地域共同研究センター,1998,『弘前市総合開発計画策定のための前提条件等に関する研究報告書』.
- 弘前市,2002,『平成12年 弘前市総合計画』.
- 弘前市,2000,『平成12年 弘前市総合計画』.
- 弘前市,2003,『弘前市都市計画マスタープラン』.
- 弘前市史編纂委員会編,1995,『新編弘前市史』.
- 弘前市史編纂委員会編,1963,『弘前市史』.

弘前市城東中央一丁目町会,1988,『町会15年のあゆみ』.
弘前市教育委員会,1975,『弘前市教育史 上』.
弘前市教育委員会,1979,『弘前市教育史 下』.
弘前市教育委員会,1979,『弘前市教育史 別巻』.
弘前市立東公民館千年分館,1972,『むかしの千年村』弘前市立東公民館.
本町略誌編集委員会,1986,『本町略史』弘前市本町協会.
石崎宜雄,1978,『弘前市城西団地におけるコミュニティ形成への提言』.
鎌田勇,1995,『向外瀬 開村三五〇年の歴史をたどる』.
北地区町会連合会,2001,『北地区町会連合会十年の歩み 町会連合会結成十周年記念誌』.
倉沢進・秋元律郎編,1990,『町内会と地域集団』ミネルヴァ書房.
弘南バス株式会社編,1981,『弘南バス株式会社 40年のあゆみ』.
真木悠介,1993,『自我の起源』岩波書店.
馬屋町町史研究会,2001,『弘前市馬屋町史』.
馬屋町町史研究会,2001,『馬屋町町会五十周年記念誌』馬屋町町史研究会.
向外瀬ねぶた愛好会,1998,『向外瀬ねぶた愛好会 写真で見る20年の歩み』.
森岡清美,1973,『家族周期論』培風館.
森岡清美・青井和夫編,1991,『現代日本人のライフコース』日本学術振興会.
成田末五郎編,1977,『板柳町誌』板柳町.
20周年記念誌編集委員会,1987,『城西町会連合会創立20周年記念誌』城西町会連合会.
大町町会史編纂委員会,1992,『大町わが町』大町町会.
六十周年記念誌編纂委員会,1992,『駒越町壮年会六十周年記念誌』六十周年記念事業実行.
桜ヶ丘町会創立10周年記念誌編集委員会,1983,『桜ヶ丘 町会創立10周年記念誌』桜ヶ丘町会.
下町町会連合会,1988,『創立40周年記念誌 下町の現勢』.
田中重好,1995,『弘前』藤田弘夫・吉原直樹編『都市とモダニティ 都市社会学コメンタール』ミネルヴァ書房,
pp. 178 - 183.
富野町会史編集委員会,1994,『富野町会史』富野町会.
豊田略誌編集委員会,1995,『豊田略誌』.
山上笙介,1985,『弘前市史』津軽書房.
山口清治,2000,『弘前の成り立ちと上土手 創立三十周年記念誌』弘前市史土手町町会・弘前上土手町商店街振興組
合.
在相町誌編纂委員会,1993,『在府町・相良町町誌』在府町会.

卷末資料：収集した町会に関する文献

町名	文献名	出版年	著者名	発行元	所蔵
弘前市東区連合会	弘前市町会連合会の三十年：語りにつづる歩みの記録	1989	弘前市町会連合会	弘前市町会連合会	大学図書館蔵
弘前市東区連合会	平成元年から10年 創立四十周年記念・歩みの記録	1985	弘前市町会連合会	弘前市町会連合会	大学図書館蔵
弘前市東区連合会	「町会のある方」について	1989	弘前市長連合会	弘前市長連合会	市立図書館蔵
北地区町会連合会	北地区町会連合会十年の歩み	2001	北地区町会連合会	北地区町会連合会	市立図書館蔵
下町町会連合会	下町の現勢	1988	下町町会連合会	下町町会連合会	
上土手町	設立30周年記念誌上土手	1982	登嶋武	上土手町町会	市立図書館蔵
上土手町	弘前の成りたちと上土手町		山口清治	弘前市東土手町町会弘前上土手町町会町会連合会	市立図書館蔵
駒越町	駒越町社年金創立60周年記念誌	1992	六十周年記念誌編纂委員会	六十周年記念事業実行	市立図書館蔵
荏府町	荏府町相良町誌	1993	相良町誌編纂委員会	相良町会	
茂森新町	茂森新町わがたの歩み	1988	茂森新町わがたの同好会	茂森新町わがた同好会	市立図書館蔵
品川町	品川町誌	1983	品川町々会	品川町々会	
田町	田町雑記	1985	笹森貞二	津軽書房	大学図書館蔵
田茂木町	田茂木町のあゆみ	1983	田茂木町町史編纂委員会	田茂木町町史編纂	
田茂木町	大伴神社の由来について	1980	中村道郎	草利書肆	
中土手	町誌(中土手町物語)	1970	安田精一	弘前市中土手町町会	
本町	本町雑史	1986	弘前市本町協会	本町町史編纂委員会	
馬屋町	馬屋町町会五十周年記念誌 弘前市馬屋町史 本町の発祥から現在の馬屋町まで	2001	馬屋町町誌研究会	馬屋町町誌研究会	
松森町	巖右衛門(新興銀行)がいた町 弘前市松森町誌	2001	弘前市松森町会	弘前市松森町町会	
大町	大町・わが町―平成二年の町並みから	1992	大町町会史編纂委員会	大町町会	
清水村	清水村郷土誌	1955	梓健健吉	栄光堂	大学図書館蔵
舊田大通り	わが街を駆けて行った歲月	1991	舊田大通り町会記念誌編纂委員会	舊田大通り町会	
高野町	高野町会史	1994	高野町会史編纂委員会	高野町会	
青山	青山町会10周年記念誌	1997	町会結成10周年記念誌編	青山町会	市立図書館蔵
桜ヶ丘	桜ヶ丘	1983	桜ヶ丘町会創立10周年記念誌編纂委員会	桜ヶ丘町会	市立図書館蔵
城西	城西町会連合会五周年記念史	1974	五周年記念誌編纂委員会	城西町会連合会	

城西	城西町会連合会創立20周年記念誌	1987	城西町会連合会	20周年記念誌編集委員会	
城西	創立30周年記念誌	1998	30周年記念誌編集委員会	城西町会連合会	
城西	弘前市城西団地におけるコミュニティ形成への提言	1978	石崎直雄		
城西	城西小学校百年誌	1983	百年記念誌編纂委員会	城西小学校創立百年記念事業協議会	
城東中央1丁目	町会15年のあゆみ	1988	弘前市城東中央一丁目町会	城東中央一丁目町会	
新里	新里駅前町会20周年記念誌—新里駅前町会のあゆみ	1988	弘前市新里駅前町会	弘前市新里駅前町会	
マルエス団地	マルエス団地町会二十年のあゆみ	1989	弘前市マルエス団地町会	弘前市マルエス団地委員会	
宮園	宮園町会結成十周年記念誌	1986	町会結成十周年記念誌編集委員会	宮園町会	
愚戸	愚戸の歩み 青柳青年学級 3冊組	1976	不明	不明	市立図書館蔵
愚戸	愚戸の歩み 青柳青年学級	1977	不明	不明	市立図書館蔵
愚戸	愚戸の歩み 愚戸青年会	1980	不明	不明	市立図書館蔵
一野渡	一野渡町内史	1971	一野渡青年会		市立図書館蔵
狼森	狼森郷望	1953	嶋海官蔵	嶋海研究所清明会	市立図書館蔵
狼森	嶋南陸奥先生	1953	嶋海官蔵	財団法人嶋海研究所清明会	
狼森	清明	1967	嶋海官蔵	財団法人嶋海研究所清明会	
清水森	清水森の歴史	1987	清水森町会史研究会	清水森町会史研究会	
下湯口	下湯口集落史 上巻	1989	石岡国雄	弘前市下湯口	市立図書館蔵
下湯口	下湯口集落史 下巻	1989	石岡国雄	弘前市下湯口	市立図書館蔵
高杉	高杉村村勢要覽	1953	高杉村	高杉村	市立図書館蔵
乳ノ井	乳ノ井 津軽のある集落史とその情景	1981	伊藤勇蔵		市立図書館蔵
千年	むかしの千年村	1972	弘前市立東公民館千年分館	弘前市立東公民館	市立図書館蔵
千年	千年地区の産業振興と連携の役割	1980	弘前大学農学部地域産業研究会	弘前市産業協同組合	大学図書館蔵
千年	千年村むかし話	不明	不明	不明	
千年	千年村村勢要覽	1954	千年村教育委員会?		
豊田	(豊田地区体育協会)創立五十周年記念誌	2001	豊田地区体育協会創立五十周年記念誌編集委員会	豊田地区体育協会	市立図書館蔵
豊田	豊田略誌	1995	豊田略誌編集委員会	豊田略誌編集委員会	市立図書館蔵
豊田	豊田小学校百年	1978	協賛会事業委員会	豊田小学校創立百年記念誌編集委員会	

糠牛子	ふるさと村の村史 糠牛子	1993	加藤肇司		市立図書館蔵
新和	村誌新和	1990	新和村誌編集委員会	竹浪清	市立図書館蔵
藤代	青森県中津軽郡藤代村郷土史	1923	中村爲之進	青森県中津軽郡藤代村役場	市立図書館蔵
藤代	青森県中津軽郡藤代村郷土史	1982		郷土史再発行委員会	市立図書館蔵
楡村	楡村小史	1970	楡村青年会	楡村青年会	市立図書館蔵
松木平	松木平開村三百周年記念誌	1985	松木平開村三百周年記念事業実行委員会	松木平町会	市立図書館蔵
向外嶺	向外嶺 開村三百五十年の歴史をたどる	1995	鎌田勇		市立図書館蔵
向外嶺	向外嶺ねぶた愛好会 写真で見る二十年の歩み	1998	向外嶺ねぶた愛好会	向外嶺ねぶた愛好会	
弥生	弥生開拓四十年史	1976	久保喜雄	久保喜雄	市立図書館蔵
弥生	弥生の五十年	1986	大淵勝昭	弘前市弥生開拓五十周年記念事業協議会	